女鑑第貳百貳號

目録

孝女志も女



朋友に對するこゝろ

近來、交際の術といふことを唱へ出されてより、輕薄なる風俗の中にても、とりわけて、朋友に對する信義といふもの、全く無くなり、たゞ、打ちむかひたるところは、極めて忠實々々しげに見ゆるもあれど、即ち、これ一つの術にすぎずして、大方、心より出づるもの稀になりぬ。いとも、慨かしきことならずや。

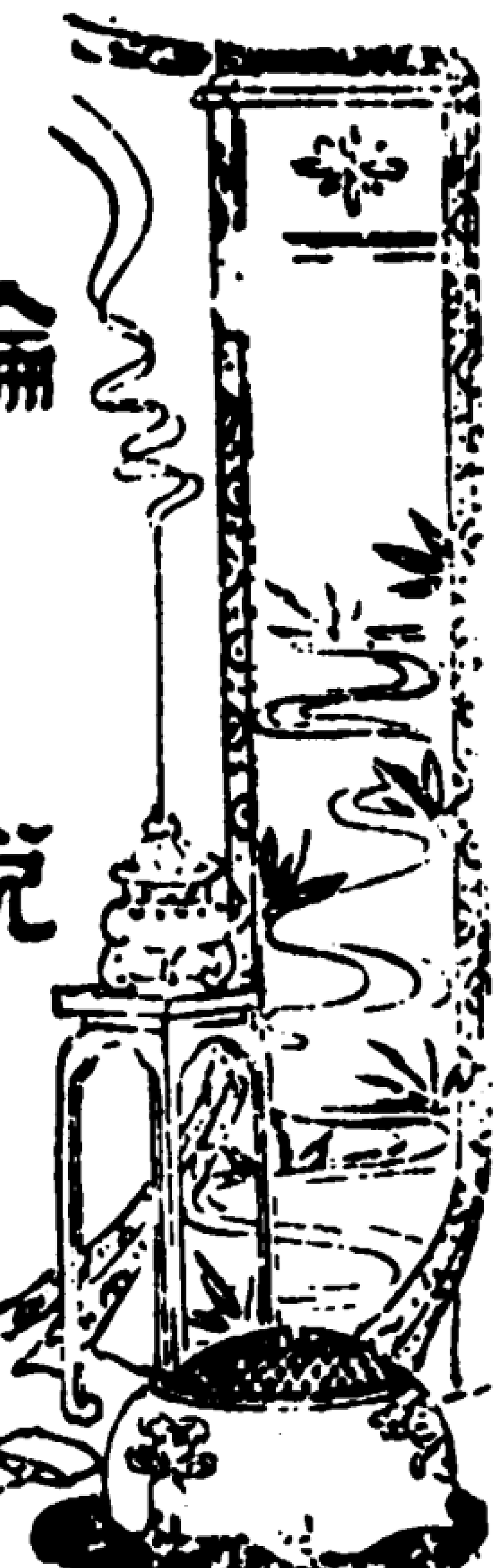
初學訓にいはく、朋友は、信をおつくし、互に、善をすゝめ惡をいましむ。これ、朋友の道なり。もし、過惡を見ながら諫めざるは、信なきなり。朋友の道にあらざるなり。また、朋友は、たのもしげありて、難あらば相助け、患あらば相救ふべし。とあり。朋友は、まことに斯くの如くならざるべからず。

朋友相親み、其の美を濟す要は、爲に相謀ること忠實にして、已の知れるところは、かくすところなく善を責め非を諫め、かつ、互に相依りて、患難共に相救ふ

ことを勉むるにあり。然はいへ、方今、歓楽を共にする朋友は、人として皆其の多くを有すれども、さて、患難を共にする朋友あるもの甚稀なり。これ、利のために交る者は多かれども、義を以つて交るものゝ稀なるによりてなり。即ち、心より信義を以つて交らむことをおきて、一向、交際の術に巧妙になりて、外見の修飾をのみつとむるが故なり。心にもなき口さきの信義は、今は、是を交際の道なりと稱すといへども、まことは、これを阿諛追従といひて、極めていやしむべきことなり。朋友の道、豈それ斯くの如きものならむや。互に眞義至誠を以つて交り、善事はあくまで之を勸め、常に人として耻しからぬ人たらしむることをつとめ、あやまちなからしめむ様に戒め注意を與へて、さて、猶、窮厄痛苦の境に陥ることあらむ、赤心之を憐み之を救ふこそ、まことの朋友とはいふべけれ。

元來、今日の所謂交際の術といふものは、たゞ専ら、一時の圓滿をのみ主とするが故に、却つて、大に朋友の信義を毀ふに至る。もし、誠の信義のこゝろ内に充實すれば、彼の交際の術といふものゝ如きは、ことさらに習ひおぼゆるまでもなく、朋友の間に處して其の圓滿を破るが如きことなかるべし。蓋し、交際の術に

のみよりて朋友の道を全うせむとするが如きは、愚しききはみになむ。



論説

日本女子今後の覺悟（十七）

三輪田眞佐子

交際上最も醜きものは、世辭と佞辨なり。但し内につもる誠意と、親切の熱情おのづから、外に表はれて和聲となり、温容となるは、大に好みすべし。決して、兩者のけぢめを混同するなかれ。されど言語は思想を發表する方便なるを以て苟も他人と、相交りて、無實の譏を免れ、あるは野卑なりとして、輕侮せらるゝことを避けんとなれは、言語の用法につき、注意せざるべからず。

凡そ、女子の交際上、その言語につき研究すべき點すくなからず。今、その要點を左に擧げん。

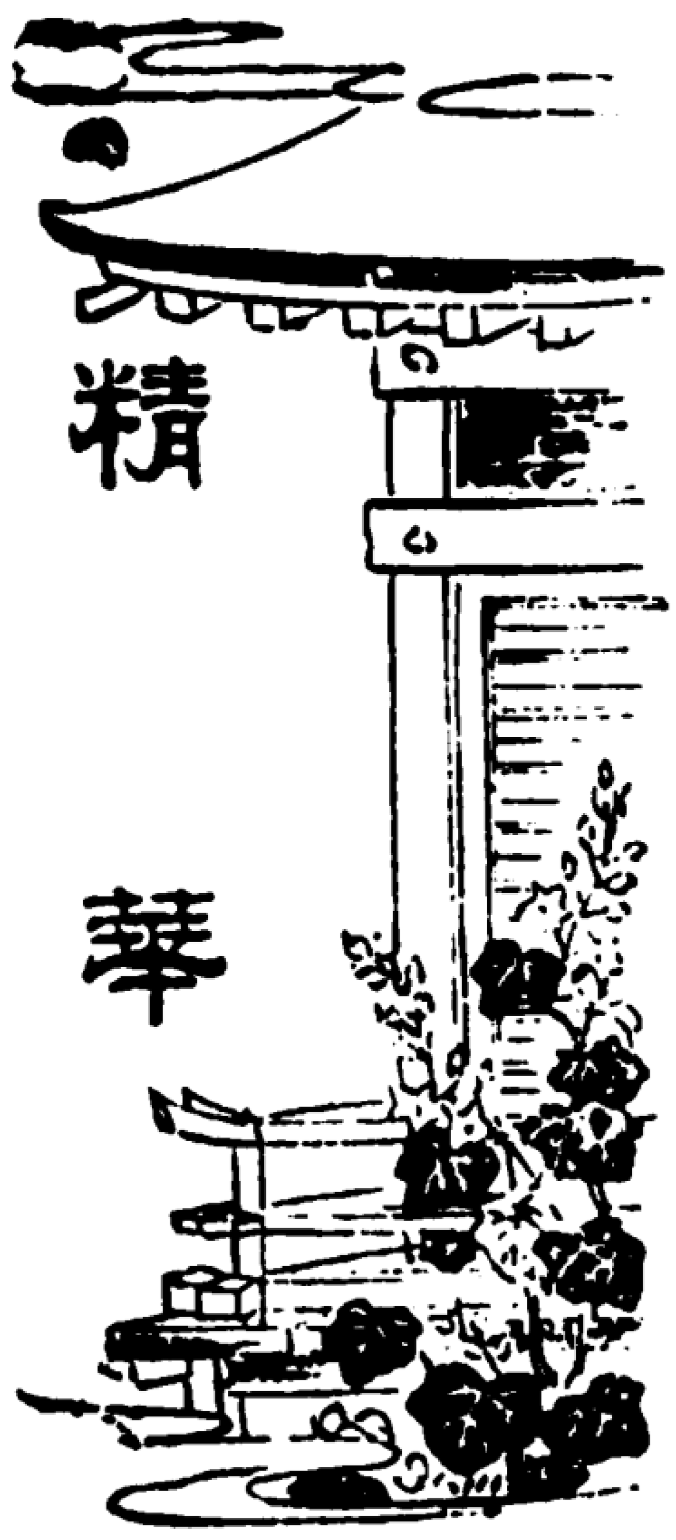
すなはち、第一は優美なるべし。たとへば、(飯をたべて行きます)といふよりも(飯をすませて參ります）といふの優美なるがごとし。わが國語に於て、三人稱を、二人稱に用ふるとき、敬語となるは、露骨ならざるを以てなり。第二清亮なるべし。女子は、大聲を出すを要せざれども、つねに言語を明に、且つさはやかに言ひなれざるものは、これと對談する人に、往々意の貫通せざることもあるべし。亦聞く人をして、感覺上不快ならしむることもあるべし。總て、不用の語を喋々するは、

惡かるべし。されど、必要の言を訥々するも善からず。第三懇篤なるべし。例令ば(人を打ちやりて、先きに行く)と言はんよりは(人を後にのこして先きに行く)と言ふが懇篤なる感あり。如何となれば(打ちやる)とは厭く意を含む(後にのこす)とは、一片の情ある思ひこそすれ。第四柔和なるべし。たとへば兼好法師が、俗人は(もたげる)を(持ちあげる)(かゝげる)を(かきあげる)と言ふとて笑ひけり。そは(ちあ)が(た)となり。(きあ)が(か)となりたるのみにて、音便上省略せらるべきものを、そのまゝ言ひしより、實は正しからんも、不用の音を附加するとなして、笑ひけんが、兎に角(燈火をかきあげる)と言はんよりも(燈火をかきあげる)と言ふが柔和に響くなり。亦、これに反して、言語を省略すれば、實用上の便利はあらんも、下品なるを免れず。例之ば、(そうです)と言はんよりも、(さようであります)が、上品なるの感あり。こは、西洋語にも、同様なり。たとへば(ありがたう)といふことを英語にて、(サンキユー)といふよりも(サンク、ユー、ヴリー、マツチ)といひ、亦(存じませぬ)といふことを、(アイ、ドント、ノー)といふよりも(アイ、ヅー、ナツト、ノー)といふの鄭重なるがごとし。

次に、言語の性質にあらずして、言語の意味につきて、戒むべき點少なからず。古人が、老者の前に於ては、老をいはずと敎へけるが如く、その對語に用ふる話柄につきて、常に取捨せざるべからず。たとへば、病人の病室に入りて、死人の話をなし、不具者に對して、その人の赤面する如き話柄を撰ぶなどは、如何にも愼むべきことぞかし。されど、人は若き時代は、一年たりとも、若きを以て歡び、既に中年を越え、極めて老年に及びて

は、反りて、高齢を以て誇る如きものなれば、老者を歓ばしむるために、老をいふは可なり。されど親の老をいひて、親をして、悲ましむるごときは、孝といふべからず。亦、處女は、年をいふを耻づる傾あれば、處女に向ひて、(御許は幾つか)と問へば、失禮なるべし。如何となれど、かかる問には(幾歳)と答ふる外なければなり。されど、(なは御許は若きか)と問はんには、その人は(否若からず)とか、亦は自ら意にまかせて(幾つ)なりと自由に返答する餘地を存すべし。

途中人に逢ひても、(御許にはいづくに行かるゝか)とたづぬるは、失禮なり。故に(御遠方に入らせらるゝか)とたづぬべし。如何となれば、前者のごとく問へば、行く先をいふ外なし。されど後者の如くなれば、若し行く先をいふを欲せざる人は、(否近くです)とか、或は自ら障なくば(いづこ)と實を告ぐるならん。亦人の住居を聞くに當りても、(どの邊に御住みか)と問へば良けれども、若し(なに町何番地に御住みか)と冒頭より迫るは失禮なり。勿論用談上の如きは別事なれども、なべて、人を餘儀なくするは、交際の禮にあらずと信ず。



公明正大

人は、生れながらにして、善良の性を具ふ。然れども、自然に放任して、養ふことなくば、外物に移され、私慾に蔽はれて、偏癖を生じ、本然の美を發揮すること能はざるべし。故に、常に、一己

の私に克ち、其の放逸せる心を收めて、禮に復らざるべからず。

己に克つことの要は、其の情慾を斬裁して、常に、邪惡を思はざるに在り。是、內を制するなり。而して、其の言語動作を檢束し、謹愼にして、禮を離れざらしむるは、是、其の外を制するなり。凡、人の言語動作は、其の心術の、外に顯れたるものにして、內に蓄ふる德の如何を表明するものなれは、品性の純正至善なると、邪曲好惡なるとは、之によりて、直に斷ずるを得べし。起居動作は、心術の外に形る丶影にして、心の實體は、必、動作の上に、影相を現すものなり。故に、其の慾を制し、情を正しくするは、即、言語動作をして、禮に適はしむる所以なり。而して、言語動作を檢束するは、亦、心性の放逸を收むるに足るものなり。蓋、外を制するは、內を守る所以にして、內を制するは、外順ふ所以なり。內外、相須ちて、克己復禮の事、はじめて全し。此の如くなれば、本然の良性、其の光輝を發し、心思、常に、公明正大にして、言行、自、規矩に合ひ完全なる德器を成就するを得べし。

夫、身富貴なるときは、驕慢の心を生し、得意の時に際しては、矜誇の心を生じ、氣力壯なるときは、凌傲の心を生ず。是、皆、恃む所ありて、其の眞心を失へるなり。又、貧賤なるときは、貪慾の情起り、失意の時は、猜忌の心を生し、氣力衰弱せるときは、安逸を貪る念起る。是、皆、求むる所ありて、其の本心を失へるなり。即、人の弱點なり。常に、よく、其の情を制し、物に因りて移されず、己に克ちて、禮に復らんことをつとむべし。

而して、己に克つは、大勇なかるべからず。蓋、

人慾は、常に、心性を殘害して、憚ることなきものなれば、賊、之より甚しきはなし。勇ならずは、焉んぞ、よく、この心中の賊を除くを得ん。世には、人を害ふ賊に克つもの、甚、多けれども、よく、自己心中の賊を攘ふことを得るもの、至りて稀なり。是、人に勇にして、己に怯なるなり。未、以て、眞の勇と稱することは能はざるなり。

人、自知らずして、不善をなすことありとも、一度、其の不善なるを知らば、直に改めて善に遷るべし。知らずして、不善を行ふは、是、過にて、深く尤むべきにあらざれども、其の惡たることを知りて、尚、一時の人目を耻ぢ、其の非を飾りて、之を遂げんとするは、本性良心に背き、眞情の實を枉げて、僞り欺くものにて、惡を長ずる所以なり。されば、改過は、善に進む好階梯にして、心術を正しくし、品行を善良ならしめんには、必、此の道を經過せざるべからざるなり。然れども、過を改むといふことは、亦、非常なる勇氣を要するものなれば、斯かる機會に際會せるときは、決して、輕々に思ひ過すことなく、奮勵して、此に努力すべきなり。其の過たるを知り、其の非なるを悟りて、尚、之を改むるに憚るものは、全く、勇氣を失へるによるなり。

又、人は、正道を蹈みて、己の分を守る勇なかるべからず、世には、是非善惡に關せず、己の意を貫徹せんとするものあり。是、大なる誤なり。故に、一たび、決心せし事も、其の誤れるを知らば、速に改むべきなり。

人、各、其の本性良心に從ひて誠意、之を省みば、事の善惡道の邪正は、自、判ずることを得べし。然れども、私慾の情を挾みて、之を量定するを以て、動もすれば、其の正を失し、遂に、執拗

に陥いるもの少からず、故に、平常、事に處して、自判すること能はざるときには、之を、父母尊長に質して、其の意を決し、以て、其の義を誤らざるをつとむべきなり。而して、其の事、正道ならざるときは、たとひ、如何なる些細の事も、斷して、行ふべからず。又、既に、吾が心に決斷して、公明正大なりとする所は、決して、他に惑さるゝことなく、水火をも避けずして、之を遂行し、よし、この身は、醢にせられ、骨は、粉碎せらるゝも、苦痛の爲に、志操を變せざるべきなり。

孝女しも

田山とり子

いつの世よりか言ひそめけむ。繼々しき中とだにいへば、かならず中らひあしき者にいひはやされて、われも他も、さして異まぬやうになり來しこそ、いとも、うたてき極なれ。然るは、大方、親なるものゝ心根直からぬより、惡しくなりまかるやうに聞きつれど、子たるものも、また、繼々しき中ゆゑと、われから僻める心にて、なにくれと繼親のこゝろを、あしざまに、おしはかり、よきこととしても善しとも思はれず、さもあらばあれ、わがまゝをのみしてなど、末遂に重き苦患となるとも知らで、樂ならぬ樂を樂として、憂き名を世に傳ふるに至るもの多し。いづれかの一方が直ならぬがありとて、對するものゝ、至誠を以て之にあたらば、などてか、遂にうるはしき人ならざらむ。まゝしき中などいふ疎しき名は、たゞ其の至誠のいたらぬところあるがためにいで來るぞかし。まづ、雷とまで異名せられし繼父に仕へししも女が、行爲にても見よ。

しもは、西成郡下新庄村の百姓太助が繼子なり。母のかんといふが此の太助に再嫁せし時、具し來りしなり。のちに、伊兵衛といふものを聟に取りてしもにめあはせけり。もとより、まつしくて田畑もなかりしかは、伊兵衛は、人の田を小作し、しもは、日傭の業をいとなみ、夫婦力を盡して二親を養ひき。繼父の太助は、尋常ならぬはげしき生れにて、牛つかひて耕すことをよくし、農業の外他事なく、田畑に出でゝも、耕作に怠るものをみれは、わけへたてなくしゝたかに罵りけるほどに、人みな仇名して雷太助とよび、童の諺にさへも、烈しき事をば太助とぞいひならはしける。聟の伊兵衛も力の及はむかきりは、よくつかへけれども、ゆく〳〵心にかなはん事覺束なしとやおもひけむ。四人有りし子どもをも殘し置きて、實家にかへりぬ。母は、其の比より病がちになり、太助も、腰いたみて、世渡りのわざかなはざりければ、村人、しも一人にては、二人の養育心もとなく思ひて、再び聟を迎へよとすゝめけれど、なまじひなる人の來りなど、親の心をとり得ずして、又も、出で行きぬべし。其の身のいひ甲斐なきをもいはずして、父母の名をたてんもはかりがたし。たゞ、此のまゝにてあることそ中々心やすけれとこたへて、聞きいれざりしが、娘は、はやとて十三歳、次ははるとて八歳、其の次は九之助とて四歳、末は、いそとて當歳なりしかば、いかに力をつくすとも、父母を養ひ遂げんこと心にまかせじと思ひとりて、はやをば次のとし、その村人に、年を限りてつかへさせ、はるをも又大坂にやりて奉公せさせぬ。九之助は八歳にてうせ、いそはまだおさなけれは、さすがに見はなちがたく、十四までそたて、是をも年季の奉公に出し、やうやうにし

て家内をはぶき、晝は人に雇はれ、夜は縫針をいとなみて世渡りをなしけるが、やとはれの勤も等閑ならざりしかば、やとふ人も亦多かりけり。朝はとく起きて食物を調へ、晝はかならず歸りて飯をすゝめ藥をあたへ、雇はれの日數終りて歸りぬれは、猶も己の心のまゝにぞつかへける。又晝のみかよひて人につかへし事有りしが、主の暇をうかがひて二親をかへりみ、わびしき中にても、醫藥または食物をも斯樣して好みのごとく求めあたへ、二便の穢をとりをさむることまでも、殘ることなく扱ひけり。寛政元年六月十四日の比より、雨はげしくふりて、三四日が間やむことなかりしに、猶も降りつゞきなば、水出で堤のきれんこともはかりがたし。病める親もちたる身は用意すべき折なりとて、里の内にても覺林寺といへるは地高きところなりしかば、物おく小屋をかりて二親

を移しゝに、果して、其の次の夜、神崎川水まして、加島村といふ所の堤をくづし、この村にも水溢れて床のうへまで湛へしかば、かねてのまうけよかりしゆゑ、難なく父母を養へり。又、おなじき十二月十八日の事なるが、しもが雇はれに出でたりし跡にて、いかゞしてかあやまちけん。火桶の火もえ移り、家の内烟となりけるを、二親ともに病者といひ、かつは、老の身の打ちけすべき力もなく、あはてまどひしを、近きほとりの者ども馳來りて、とかくして、二人をたすけ出しけり。しもはせかへりて、此の有さまにおどろきけれど、二親のなにごともなきをみて、こゝろおちゐ、近き隣に茶をこひ來りてすゝめ、そのゝち火を救へるものにむかひて、禮いひけるさま、其の誠彰はれけりとて見る人ごとに感じあへり。父は異名とりたるはげしきものなるが、後には、かれが志に

感じて、訪ひ來る人にも、おもが年比の孝養身にあまりて、更に娘ともおぼえずなどかたりしとなん。夫に別れしより十六年が間、いさゝかも怠る事なくつかへけるが、太助は、同二年正月七十三にてうせ、母も七十にて、その九月なくなれり。太助は、今はのきはにも、おもにむかひて、實の親ならぬを、年月深切なりし孝養のほどわすれがたしとて、掌をあはせ、拜みつゝ終りけり。これらの事、代官羽倉權九郎、幕府に聞えあげしかど、次のとしの二月に、銀給はりて、其の孝を彰はせりとぞ。

波留女

山本正周

美濃國中島郡沖村の農總內といへる者の女に波留といへりしは、年十一なる時、河內國八上郡長曾根村の農德右衛門の家へ、十年の期を定めて、下女奉公に行きけるが、德右衛門の家は、初め富豪なりしに引かへ、家產次第に傾き、その上子供は、皆夭死し、遂に貧窮に陷りければ、家財田畑も、皆賣り盡し、奴婢には、夫々暇をつかはし、波留にいへるやう、見らるゝ通りの次第なれば、そなたにも、暇を遣はすべければ、何れへなりと、心のまゝに、改めて、奉公せよといひけるに、波留は主人に向ひて、此の身もし、御氣に召さずば、是非なけれど、さなくば何時までも、御家に在りて、貧苦を共にせむと、此の身の願なりといひて、去るべきけしきあらざれば、主人も、深く、其の實意に感じて、波留の意にまかせけり。是より波留は、主家の事を、一身にひきうけ、千辛萬苦して、主人夫婦を養ひけるか、後に主翁は病に罹り

て、床に就き、其の妻も、また多病にて、僅かに起臥を得るのみなれば、波留の苦勞は、筆にも口にも盡すべくもあらず。或夜のことに、主翁は茶粥を食べたしと求めけるに、米あれども、之を炊ぐべき薪なかりければ、波留は惡きことと思ひながらも、窃かに隣舍の藁三把を盗まんとしけるを、忽に隣翁に見咎められ、いたく打ち懲らされたり。波留は、逃んともせず、涙ながらに、其の罪を謝し、かつ事の始終を告げけるに、其の言葉の誠實にして疑ふべき節なければ、隣翁も、今は、却て氣の毒に思ひて、其の罪を問はず、自ら、三十把の藁を携へ來りて、波留に贈りしとぞ。其の後主翁はみまかりけるが、波留はなほも、主嫗を養ひて、倦まず。終には、此の事、官に聞え身を終るまで、米を賜ひて、其の忠實なることを賞したまひけるとなむ。



家政　女禮

有住常子

同別酌取り樣

先、嫁里出の時、父母親族の祝盃は、別酌にすべし。本酌加の作法、披き酌の如くにして、御酒を加て、本酌加たち上る時、双方一同に立別るゝ樣にすべし。

小流酌取り樣

年始諸祝儀式の節、流れと云ひて、貴人の御盃を一同に給る事あり。先づ數の盃を出し、酌人出で、貴人つに一獻き、めし上り殘りの御酒を、數

の盃に少しつゝ移し、うち一つを取りて、銚子のわたり長柄の先き銚子のまん中にをたりたる細き所を云ふなりにのせ、下座に下り、控へ居る時一人づゝ出て、貴人へ、一拜して、盃を取り、愼て戴き、扨御酒を受け、呑をはらば、又一禮し、盃を持たる儘、御次へ入るなり。人品により肴を給はることもあり。

大流酌取り様

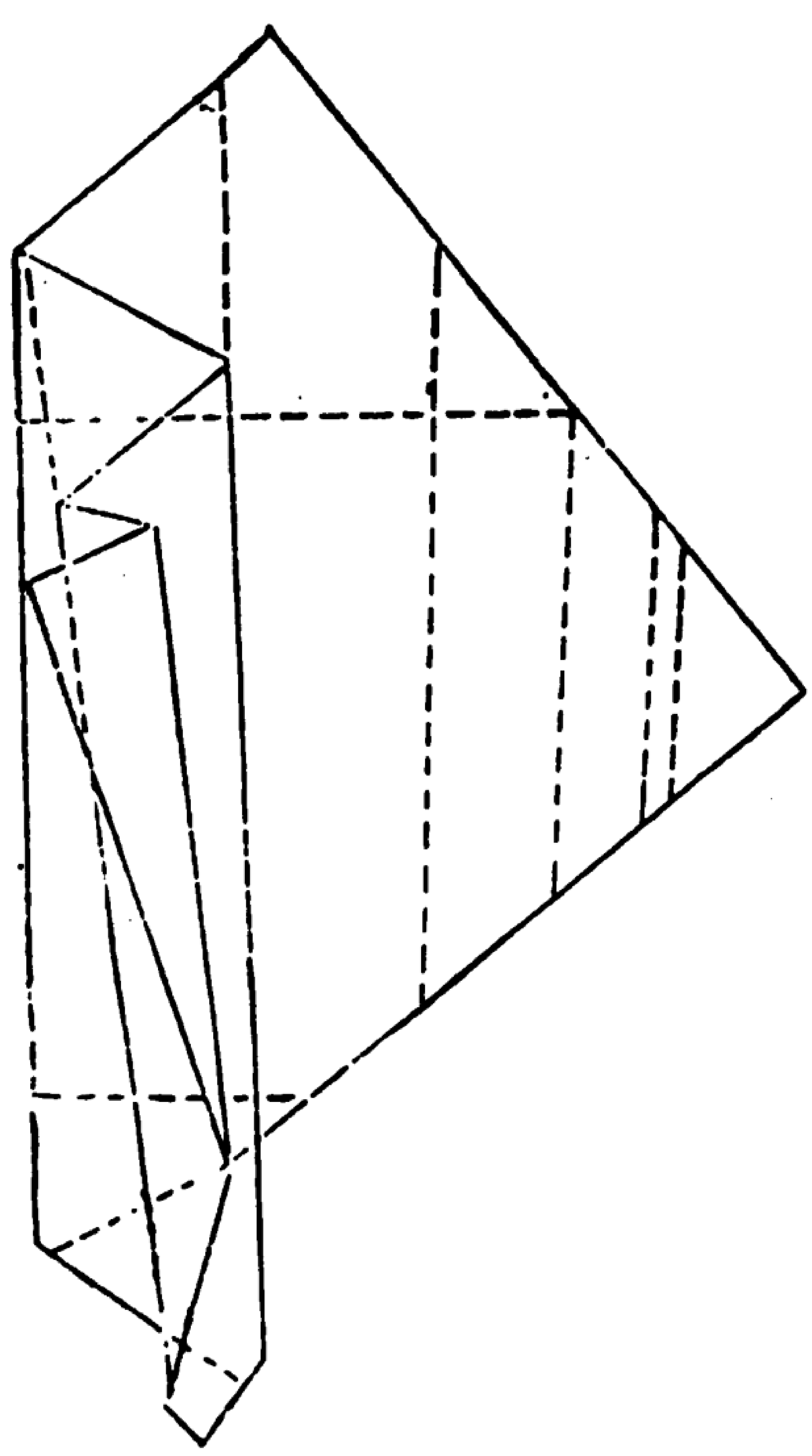
先貴人の御前に、御盃一ッ出し、下座に數の盃を出し置きて、貴人御座に付たまはゞ、貴人に一獻つきのまれたる御酒の餘りを銚子に入れ、酌人は、下座に下り控へ居る時、受る者一人ツゝ出で一拜して、盃を取り、御酒を受けて、後ち愼て戴き、のみをはつてしづかに、一禮して、盃をもちて立つなり。是は小流れよりは、輕きともからに給る作法なり。委敷事は、婚禮式並に、諸祝儀式の部に出すべし。

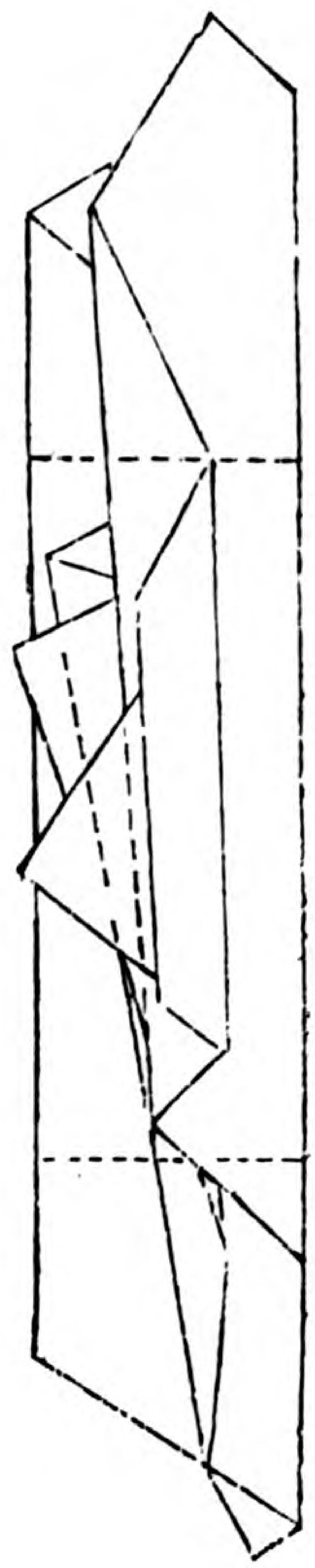
折方

有住くわう子

紅包

是は、常に用ゐるけしやう紅の包方なり。水引もかくるなり。





（折りあかり）





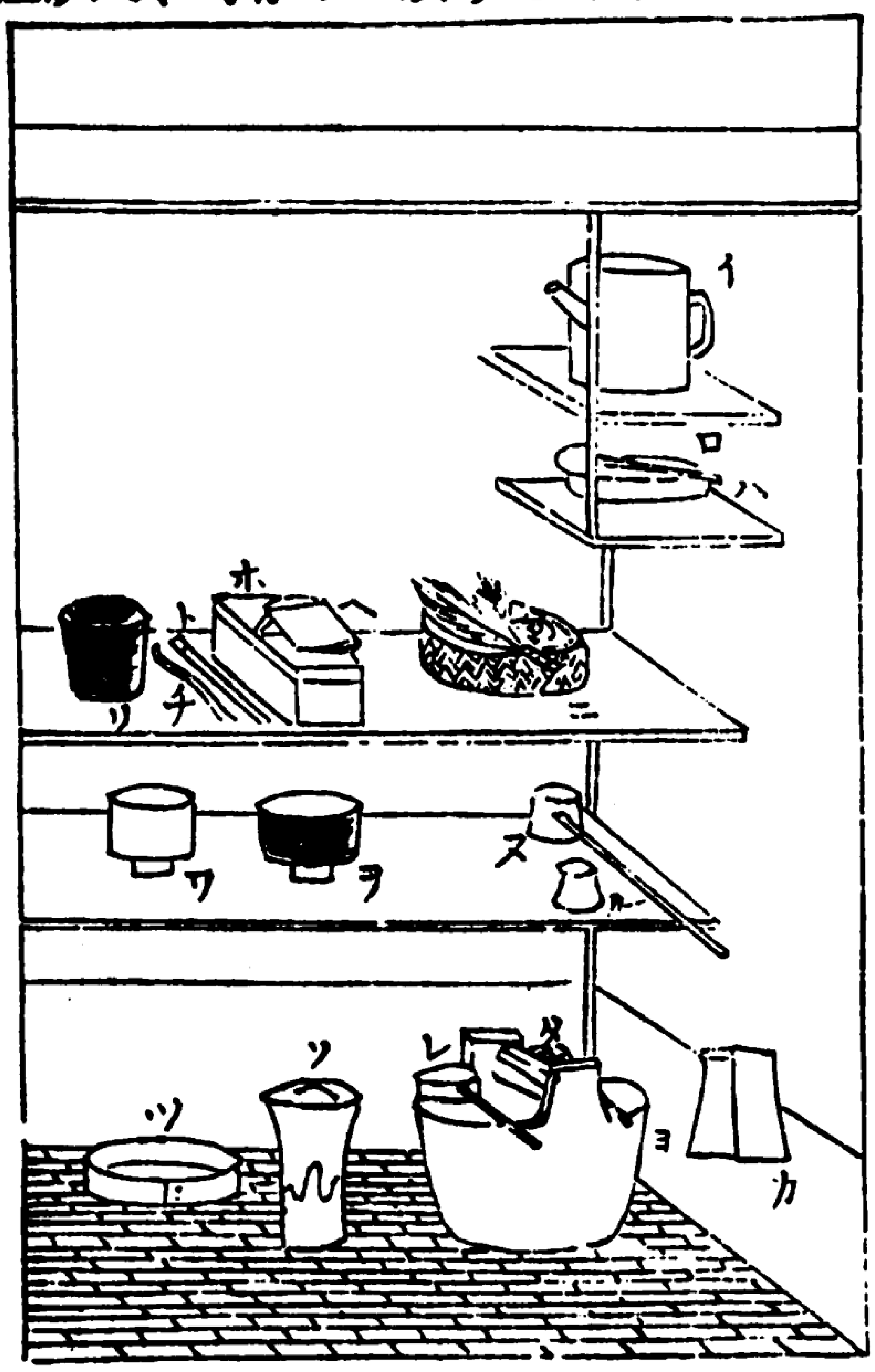
茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰龍碌仙齊不羨
關　葦　雄

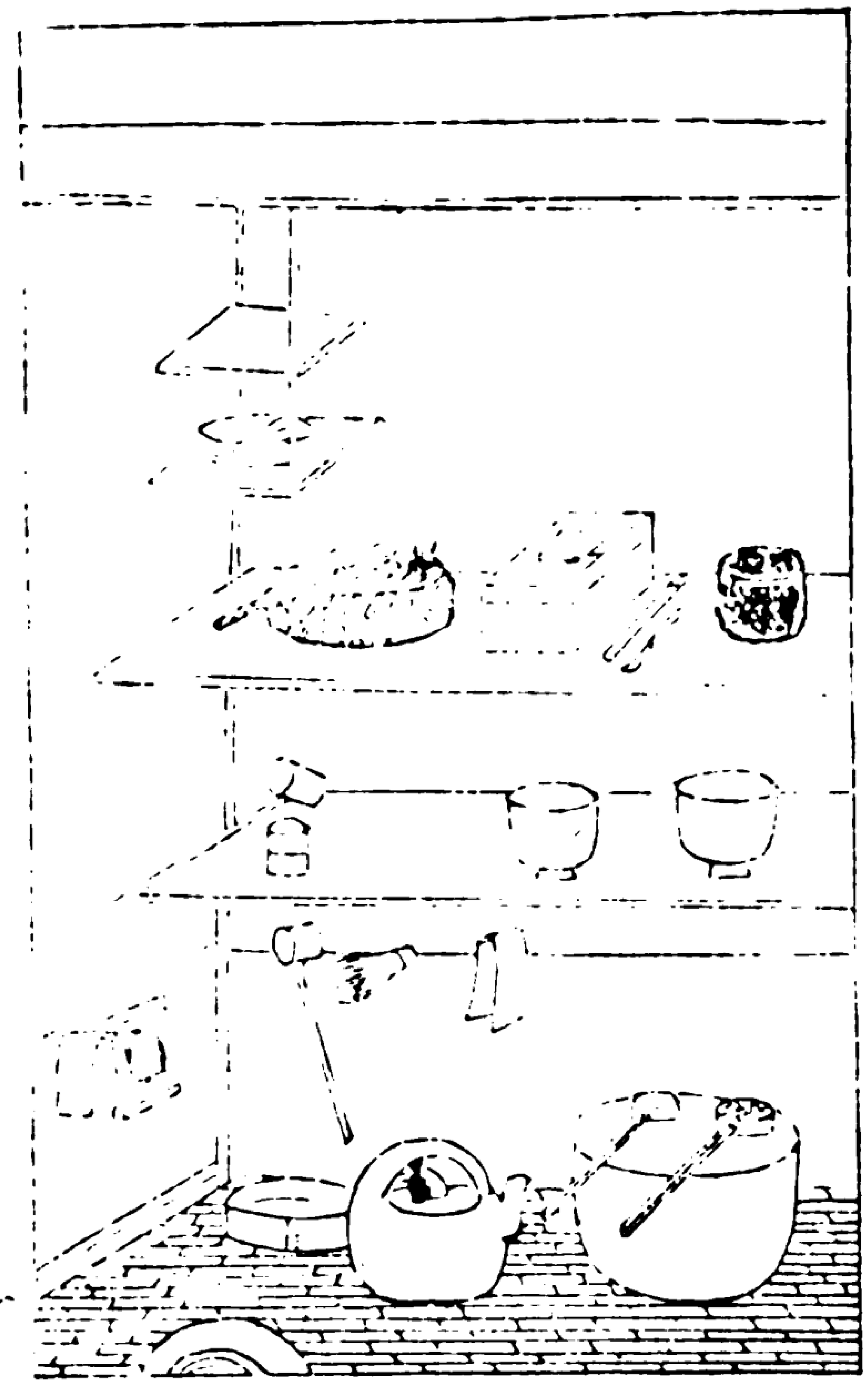
水屋飾

不羨云、此木屋と云ふものは介孃方の略御承知の如く、茶を點ずる時の勝手臺所と云ふとも諺言にわらざるなり。此の寸法に種類多く、六尺四尺五寸三尺の三種



あり。雖レ然六尺は、餘り廣過て、掃除の時も手數を煩はす事多かるなるべし。三尺は餘狹隘にして、遣ひ憎く、四尺五寸なれば、其の宜布を得たるもの成べし。飾りの器具配置、其の全きを得たるものなり。隅の小棚を炮錄棚と云ふ。其の下の段を通し棚と云ふ。其の下を茶碗棚と云ふ。向ふ正面左右に入る板をはゞき板と云ふ。下の流しには竹の簀子を付くべし。則圖式次に付す。水屋は勝手の事故、來賓諸孃は、漫りに、爰に入る事を不レ許、若又一覽せんと欲せば、主婦君へ乞ひ、許可を得て、後拜見すべし。客方にて、茶を點る時も、

御道具を拜借致度と云ひ述て、后水屋へ入るべし。無斷にて入るは、大に茶禮を不レ知責有るべし。縱令入見るとも、飾りの器物を無レ謂、手に取見るべからず。茶を點、炭手前はするとも、



其の器械は元の如く、差違なき様に置合すべし。炭を勸めたらは、炭取を如レ元、炭を組み、枝炭を添、灰炮鉄の灰の不足を差足置くべし。

イハ　片口湯桶　ロハ　灰炮鉄　ハハ　灰匙　ニハ　炭斗内に炭羽箒　枝炭　釜敷　火箸　ホハ　茶通箱　へハ　帛紗　トハ　茶杓筒、　チハ　茶杓　リハ　棗　ヌハ　柄杓　ルハ　蓋置　ヲハ　茶椀　ワハ　替茶椀　カハ　布巾　ヨハ　水屋　手桶　タハ　水こし　レハ　かひげ　ソハ　水指　ツハ　茶巾盥内に茶筌　茶巾漬置

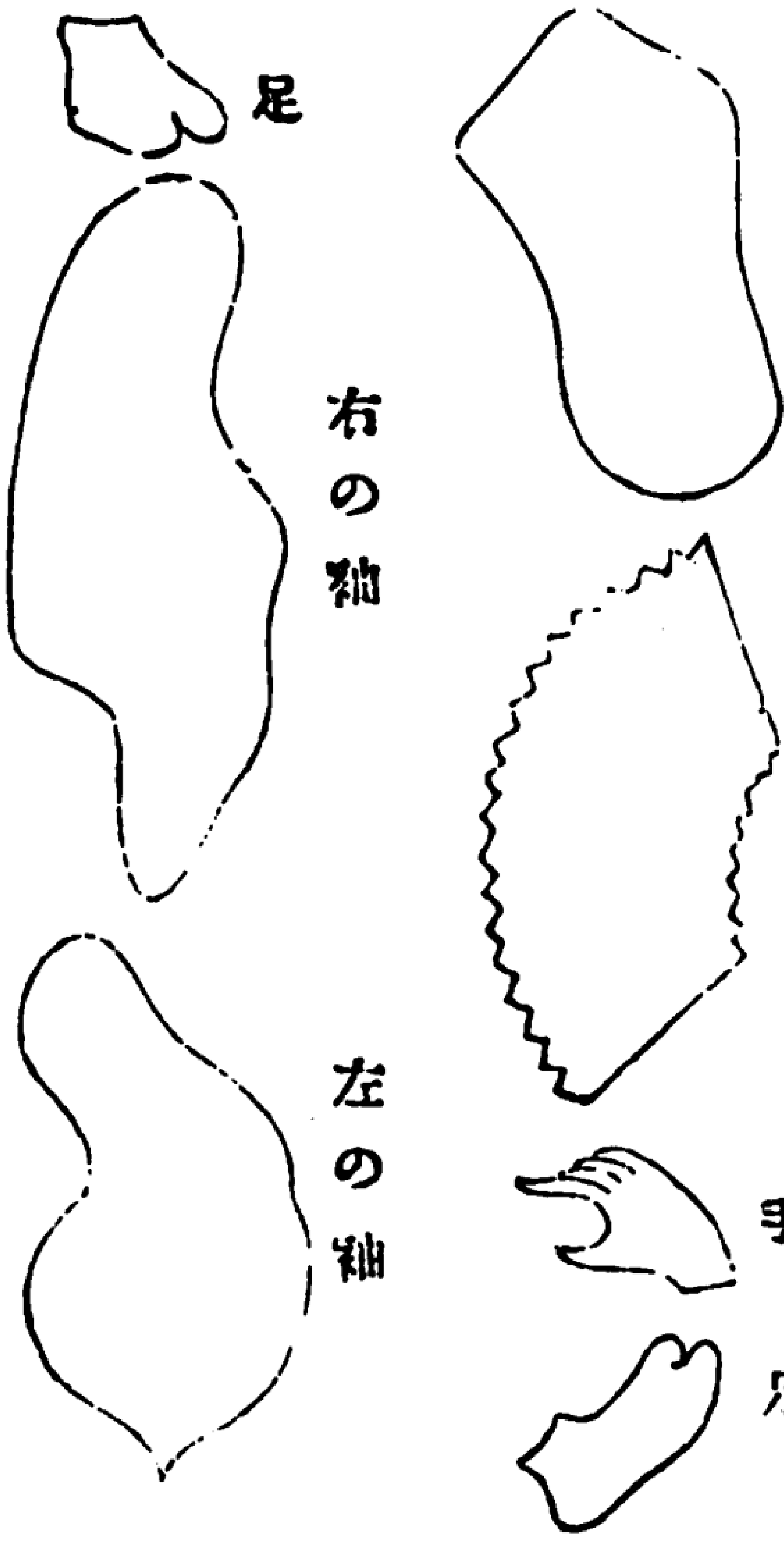
第二圖も勝手を異にするのみ。飾方に差違なし。爲ニ參考一記す。尚敎授せんには、建水、右の柱に手拭腰板に雜巾左りの腰板に私巾、次に釜洗ひ、釜居、向腰板に換柄杓、替茶筌替茶巾、又、上の通し棚には、花臺、花水織小刀半田底取長火箸臺、十能茶掃函、内に前紗茶七茶　茶挽溜、其の外便宜に任す。尚又、上上戸茶合

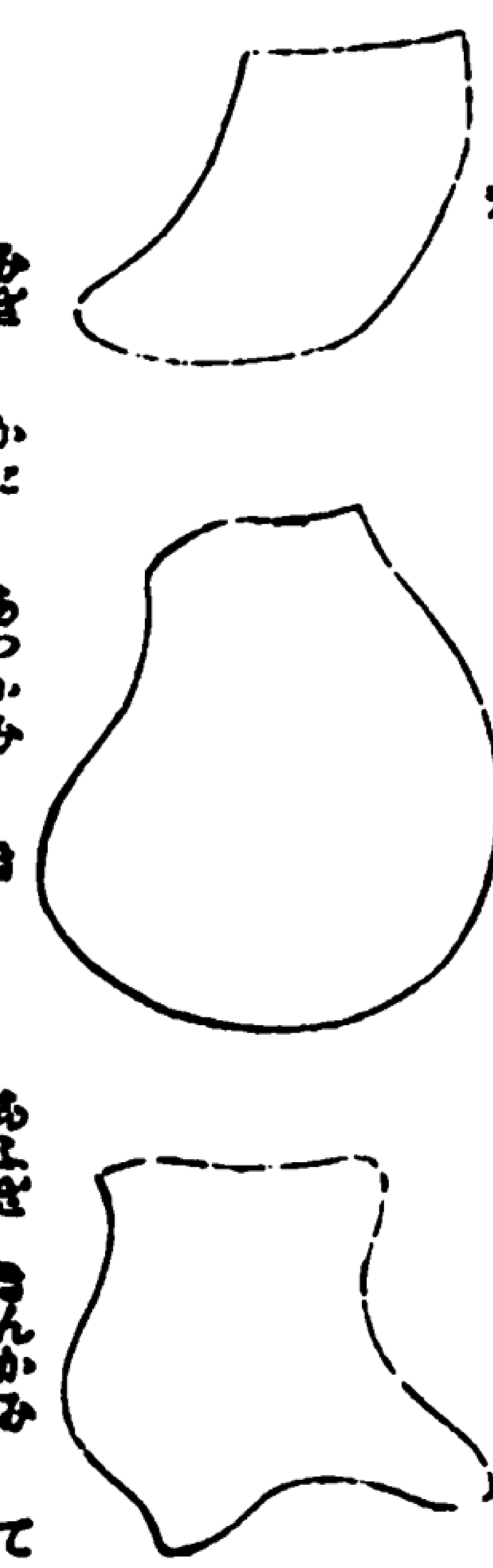
下の棚置合せを見て、參酌すべし。若、假置の一品にても、勉めて正整たるべし。

たちぬひ

三番叟

西山たい子





まつ、右の形に厚紙を切り、扇は金紙、手足は白き紙、又は丁寧なるは、白絹等にて綿を入れずはり、顔、衣服には綿を入れて、顔は白絹、衣服は何にても思ひの切をはり、烏帽子、目鼻等を畫くべし。左の圖を見て推し玉へ。



栄花園

春の草木くさ〴〵

櫻　天地正大氣粹然鍾二神州一。秀爲二不二嶽一巍々聳二千秋一。注爲二大瀛水一洋々環二八洲一。發爲二萬朶櫻一衆芳難二與儔一。凝爲二白錬鉄一鋭利可レ斷レ鍪云々と東湖先生の生氣の歌にもよまれし如く、げに神洲の生氣の發したるにもあらむか。世界萬邦、何の國と雖も、未だかくの如き名葩あるを聞かず。これは明人宋景濂といふもの、我が萬朶の櫻の、ことの外に美はしきみて、さすがに欄きがたくやありけん。

賞レ櫻日本盛レ於レ唐　如レ被三牡丹兼二海棠一
恐是趙昌所レ難レ畫　春風纔起雪吹レ香

と如何心にくゝやありけん。されば何事も、己が國のものゝみめづる外つ國人も、此の花にのみは心うかるゝなる。

師木島のやまと心を人とはゞ
朝日ににほふ山さくら花

と本居翁の詠せられしもいかばかりふかきみ心やありけむ。實に神洲正氣の現はれたる所の優美なるものにして、又一方には中郎は、嘗て之により て、宗社を磐石の安きに置き、清麿は、之により て妖僧の肝膽を寒むからしむ。然るを如何せん。今や、花の美は、昔日と異ならざれども、あはれ人心は、古の如く放光の景だになきを。やよ、君子國の名ある國人起さらむか。〳〵。古はかくも山櫻の如く優美に、時には抜山蓋世の大勇ありしを。

異名、夢見草　わたな草　吉野草　かさし草　曙草　尋見草

種類　八重櫻　昔は南都の御庭にのみ香れるもの

なりしとか。されたる伊勢大輔は、
いにしへの奈良の都の八重ざくら
　けふ九重に匂ひぬるかな

犬櫻と云ふは、木も葉も、常の櫻に同じ、小花穂をなす。山に多し。其の他

渦櫻　樺櫻　遅櫻　烏帽子櫻　小櫻　伊勢櫻　普賢象櫻、緋櫻　楊貴妃櫻　等數百種もあり。

　四月に手入すべき草木

此月になりぬれば、春霞いよ〻ふかく、春風は香を吹き送り、昇る朝日いとのどやかに、峯の櫻にほひあざやかなり。か〻るときには、庭の草木に手入するも、いと心行く業なるべし。

分栽すべきもの

南天　梔子　芭蕉　紅蕉　石竹　瞿麥　菊　苗

碧蘆　蓮　萬年青　胡枝子花　蘭の類　虎刺

移植すべきもの

木犀　冬青　薔薇　夾竹桃　枇杷　菖蒲　檜

楊梅、茶　芙蓉　躑躅　杜鵑　石楠　藤　剪

秋紗

扦挿すべきもの

山茶　羅漢松　薔薇　月季　瑞香

接換すべきもの

羅漢松　合歡　楊梅、冬青　たいさんぼく　きんかうばく　ぎんかうはく　交讓木　枇杷　柑橘類　金松　百兩金　珠砂金　素幣竹柏　黄櫨

臨時の客の應接さだいどころさの記者、このごろ、微恙にか〻りて筆さりあへれば、今號は之を掲けず。讀者諸孃之を諒せられよ。



學藝

國文學講義

磯野徳文

（三）（前回の續）

或は、田宅の界をあらそひ、或は、金銀の債をはたりて、双方いかりをおこし、遂には、公事訴訟にもおよぶほどに、一郷のさわぎともなるぞかし。其のはじめをたづぬるに、我が身にひいきする心よりおこりて、常に、おのれを是として、人を非として、己が利をのみしりて、人の害をかへりみず。元より、我が身のためをおもふは、人ごとにおなじこゝろなり。然るに、人として、なさけをしらぬは、木石におなじ。何事も、人の上を思ひはかりて、我が身ひとつを先だつべからず。唯、我も人も、よきやうにと心得べし。しからば、などか和睦せざらん。

●アルヒは、デンタクノサカヒをあらそひ、アルヒはキンギンのサイをはたりて、ソウハウ、いかりをおこし、ツヒには、クジソシヨウにもおよぶほどに、イチガウのさわぎともなるぞかし。○或は　或謂ハのつゝまりたるにて、二つのものごとにわたりていふことばなり。田宅は、土地なり。田は、ものをうゝる土地、宅は、我が住居する土地をいへり。界をあらそひは、甲地の主と、乙地の主と、各、ひろからんことを欲して、界をおしひろめんとするを、互に、さはさせじと、おだやかならずいひあふをいふ。金銀は、金錢をいふ。金銀は、貴きものにて、之を貨幣とするよりいへり。債は、また、

オヒメとも訓む。借りて、かへすべき責を負ふをいふ。はたりは、催促するなり。双方は、甲乙両方なり。こなたも、かなたもといはんが如し。遂には、ツヰにはとある本はわろし。ツヒにはとあるべし。果てはといはんが如し。公事訴訟は、事を官に訴ふるをいふ。公事は、もと、おほやけごとにて、政事、または、諸の儀式をいへるが、後うつりて、訴への事にいへり。訴訟も、官にうつたふるなり。訴は、官に告げて、冤枉をうつたふるをいひ、訟は、官にうつたへて、人の為に、冤をそゝぐをいへり。およぶほどには、及ぶ(ナル)間にのこゝろなり。一郷は、また、ヒトサトともよむべし。さわぎは、世にいふ騒動なり。かれこれといひさわぎて、おだやかならぬなり。ぞかしのぞは、ことぞをつよめていひ、かしは、念をおしていふことばなり。たしかにいひ定めて、さて、さく人に、サウデハナイカと、同意をもとむるほどのことばなり。以上をいひかふれば、或は、田地宅地などの界を争ひあひ、或は、金銭を人にかして、後借りたる人の情状をもおもひやらで、しきりに催促すれども、借りたるかたも、期日の約をばたすべきをば、かへり見ずして、たゞ、貸したる人の催促のきびしきをうらみなどし、互に怒り争ひ、はては、官に訴ふるにいたれば、親族朋友も、甲につくもあり、乙につくもありて、一郷こぞりて、騒動するにも至るべしとなり。

●そのはじめをたづぬるに、ワがミにひいきするコヽロよりおこりて、ツネにおのれを、ぜとして、ヒトをヒとし、オノがリをしりて、ヒトのガイをかへりみず、○たづぬは探るなり。ひ

いきは、ヒキ(援引)をのべてヒイキといへるなり。シジ(四時)をシイジ、シカ(詩歌)を、シイカといふが如し。又、贔負の音の延びたるなりともいへり。力を添へて、引き立つるをいふ。おこりては、ハジマリテなり。己は、我なり。是は、直きなり。非は、直からざるなり。利は、便の宜きをいひ、害は、そこなひ、さまたぐるをいふ。かへりみずは、一方をのみ見て、後をみぬをいふ。△其の、一郷のさわぎとなることのはじめを探りてみれば、たゞ、我が思ふことをすることを直しとのみおもひて、人の直きをも直しとおもはず、我が身の便宜をのみ知りて人の身のさまたげとなるをば、心にもかけず、ひたすら、我が身の爲をのみはかるよりおこれりとなり。

●モトより、ワがミのためをおもふは、ヒトごとにおなしこゝろなり。シカるに、ヒトとして、なさけをしらぬは、ボクセキにおなじ、○人ごとには、人毎にゝて、人々みなといふこゝろなり。おなじこゝろは、おもふ心はおなじことなりとなり。然るには、シカアルニにて、サウアルニのこゝろなり。俗に、サウデハアルがといはんが如し。なさけは、あはれみの心にて、慈悲なり。木はキにて、石はイシなり。△もとより、我が身の爲を思ふは、人、皆、同じけれども、人と生れて、人をあはれみめぐむ心なければ、木石にひとしとなり。

●ナニゴトもヒトのウへを、オモひはかりて、ワがミひとつをサキたつべからず、タヾ、ワレも、ヒトも、よきやうにと、コヽロウべし。しからば、などか、ワボクせざらん、○人の上は、他人の身の上なり。心得べしを、コヽロエベシ

とよみたる本はあやまれり。得は、ア行にて、ウ、ウル、エ、エ、エヨと、下二段に活く語なれば、コヽロウベシとよむべし。などは、何故にて、何としてなり。和睦はヤハラギムツマシキにて、和親のこゝろなり。せざらんは、セズアランヤのこゝろなり。△何事にも人の身の上を思ひやりて、たゞ、我が身のみを、先には、すまじきなり。我が身にも、人の身にも、共によきやうにせんと心がくべし。かくせんには、何として、和ぎ親まざることのあるべきか。必、和睦すべしとなり。

漢文學講義

佐々木天游

竹化石記

後藤松陰

長嘯館主辻氏。世爲ニ播州中富里長一。淸愼。性愛レ竹。而所三以有ニ此號一。蓋取ニ諸王輞川竹里館詩一也。頃獲ニ石之肖ニ竹連理一者上。其一長三尺强。其一減レ之五寸許。而其圍皆一尺四寸許。聞レ之。其隣村有ニ石工一。掘ニ石壙一而得レ之。俗謂ニ之脱石一。豈化石之謂乎。主人大喜如レ獲ニ拱璧一。乃置ニ之於庭下一。不ニ啻朝夕袍笏拜一レ之。又請レ余記レ之。促レ之再四。余未レ得ニ其說一。且爲ニ蒙叟之語一以問焉曰。嗚呼汝石之夢爲レ竹歟。竹之夢爲レ石歟。石固不レ言。竹亦不レ笑。豈主人之心。淸虛堅實。所ニ以感而致一レ之也乎。

長嘯館主辻氏は、世々播州中富の里長たり。淸愼にして、性竹を愛す。而て、此の號ある所以は、蓋し諸を王輞川竹里館の詩に取れるなり。此頃ろ石の竹の連理に肖たるものを獲たり。其の一は長さ三尺强、其の一は、之に減ずること五寸許、而て、其の圍みな、一尺四寸許。之を聞くに、其の隣村に石工あり。石礦を掘て、

之を得と、俗に之を脫石と謂ふ。豈、化石の謂か、主人大に喜むで、拱璧を獲るが如し。乃ち、之を庭下に置き、啻に朝夕袍笏して、之を拜するのみならず、又、余に請うて、之を記せしむ。之を促す再四。余未だ、其の說を得ず。且らく蒙叟の語をなして、以つて問ふて曰く、嗚呼汝石の夢に竹となるか、竹の夢に石となるか、石固より言はず、竹亦笑はず。豈に主人の心、淸虛堅實感じて、之を致す所以か。

竹化石とは、竹の化石のことなり。さて、長嘯館(長嘯は、長く嘯くと云ふことにて館號なり。萬松堂竹亭など、云ふに同じ)の主人辻氏は。代々播摩國中富村の村長、(理長は、里正に同じ、庄屋のことなり。)でありますが、其の人となりは、淸廉にして、無慾、謹愼にして、貞直で、性來、大變に竹を好み愛する所の人でありました。さうして。

此の長嘯館と云ふ家號をつけた所以のものは、蓋し(蓋と云ふ字の用方に、起語辭と接語辭との二樣あり。起手助語辭に用ふる時は、虛字にして、別段に指して云ふ所なし、接語辭に用ふる時は。上文を領接して云ふ詞にして、推原の辭なり。茲、所の蓋は、推原の辭にして 長嘯館と號する所以の意を推察すればの意なり。)其の名づくる所以を推察するに、之を(諸は之字と意同じ。唯之字は實にして、諸字は虛なり。又於字に同じ)王輞川と云ふ人の、竹里館の詩句の中より採りて、長嘯館と云ふ、館號をつけたのぢや。(王維字は摩詰盛唐年代の人なり。九歲にして辭を屬するを知り、仕へて尙書右丞に至る。艸隷に工に、畫を能す。別墅を輞川に營み、裴廸等と、其の中に遊んで、詩を賦して、樂となす。輞川の稱ある所以なり。竹里館は、輞川の別墅中に在り。其の詩に云、獨

坐幽篁裡。彈琴復長嘯深林人不レ知。明月來相照と。長嘯の字は、實に詩中の第二句の、彈琴復長嘯とあるより。取りて名けしなり。)

ところが、此の頃石の二股竹に、似よりたるものを、手に入られましたが、(連理はふたまたと云ふことなり。肖は似に同じ、獲は、手に入るゝと云ふに同じ。)都合二個でありまして、其の片々の一の方は、長は三尺(强は稍々多きところにて、俗にたつぷりと云ふことなり。)少し餘りありまして、其の片々の一の方は、前の一の方に比へますと、長さが五寸許りへりて、短かくございます。さうして其の周圍の大さは、兩方とも、同じことにて、一尺四寸許り宛でござりますが、どうして、此の石が見付出されしかと云ふことに付て、其の話を聞きまするに、其の中富村の隣村に、石工の石切がありまして、石を切出す壙穴を堀りまして、さうして、此の二個のめづらしき石を掘出したのであります。普通世俗には、此の石のことを、脫石と申しますが、豈(豈は反語の辭にて、なにしにと云ふほどの意なり。)になにしに、脫石と申すことは、化石と謂ふ意味であらうか。大方化石と云ふ意味でゝもあらう。(乎は疑うて未だ定めざるの辭にて上文の意によりて、商量の意を帶ぶる所と、詠歎の意を帶ぶ所と、辨駁の意を帶ぶ所との別あり。茲所は、商量の意を帶ぶ所にて、俗語のさうでもあらうか杯云ふことに同し)

主人の辻氏が、此の化石を得て、大變に喜ばれまして、宛も、一抱程もある樣な、大きな璧でも手に入れられた樣にめづらしがり嬉がりして、(拱璧左傳の襄公二十八年に、與二我其拱璧一。吾獻二其柩一、注に大璧とあり。字書に両手合セ持チ爲レ拱とあり。俗にひとかゝへと云ふ程の意なり。)乃ちそこで、

(乃は上を承け、下を起すの辭なり。)此の化石を庭前にすゑ置きてたゞ〳〵に。(啻は止に同し。何ぞ止と云ふ程の意なり。)朝な夕なに、袍(和名鈔に云、袍和名宇陪乃伎沼)の上衣をき、笏(笏は手板なり。俗に云ふ尺のことなり)の尺を手にし禮容を正うして、此の石を再拜して、石を敬するのみに止らずして、又、其の上に、余に誚ひ願うて、此の化石のことを記ししふらさしめて、(石を禮拜すと謂へは、何か可笑な樣のことに聞ゆれども、石を愛するの癖あるものは、又格別とみえまして、石林燕語と云ふ書にも、米元章の石を好む話を載せて米芾好奇石。知無爲軍。初入州廨。見立石頗奇。曰此足當吾拜。呼曰石丈とありまして、米芾は奇石を見れば、狂喜して禮拜した人であります。今辻氏も、矢張元章の樣な、愛石の人とみえますが、袍笏拜レ之云々は。暗に此の典故を用ひましたものであります)どうぞ〳〵と、三度も四度も、(再四はしば〳〵と云ふ意なり。)催促いたします。けれども自分に未だ、其の化石の說を考へ得ませぬので、何と云ふことを記してよいやら思案がつきません。そこで、不取敢しばらく、(且字は樣々な用方がありまして、所により深一歩の語にもなり、未定の辭にもなり、借曰の辭にもなります。併し茲所にては、姑且の意と解すべし)荒唐た言葉を以て(蒙叟之語蒙叟とは、莊周と云ふ人のことであります、蒙は地名で、叟は尊レ老の稱であります。莊周は蒙と云ふ所の人でありますから蒙叟と申すのであります。此の人は、能く寓言をなす人で、なか〳〵文辭に巧な人であります。併し、其の論ずる所、多は荒唐の語でありますから、荒唐た言葉を蒙叟語と申します。併し亦爲二蒙叟之語一で。莊周のまねをして、以つて化石

に問うて曰くと解しても、宜敷御坐ります。それは荘周が著しました、齊物論の中に有名な胡蝶夢の寓言がありまして、昔者荘周夢爲二胡蝶一云々。不レ知周之夢爲二胡蝶一與。胡蝶之夢爲レ周與云々と云ふ、文字があります。そこで今自分も、とんと、化石に付て、面白き説を案じつかぬものだから、しばらく荘周の口調をまねて、汝石之夢爲レ竹歟云と申したとの意なり。個樣に解釋しました方が、寧ろよい樣であります何れでも宜敷でざります。）化石に尋ねて申しまするには、嗚呼ほんに、（嗚呼は歎辭にして、痛切嗟歎の意なり。併し茲所にては、俗語のほんにと云ふことゝ同しこゝろと知るべし。）汝そこもと、石が夢に化して竹となりたのである歟。（歟は乎字と同しく。疑ふて未だ定めざる辭なり。されど乎字は輕く、歟の字は穩かなりと知るべし。俗語のどうであろうかと云ふ程の

意なり。）果して、亦、汝ち竹が夢に化して、石となつたのであらうが、前に引きし、荘子の不レ知周之夢爲二胡蝶一與。胡蝶之夢爲レ周與と、同一筆鋒なり。）どうであろうかと、尋ねてみましたけれども、石は固より勿論ものいはずして、一向に返答がない。さうして、竹も亦石と同しく、默々として、笑もせず、一向は返答がないから、竹の夢に化して、石となつたのやら、石か夢に化して、竹となつたのやら分らぬが、豈（茲所の豈は反跌の辭にして、豈に其の意と知るべし。）主人辻氏の心柄が、淸く虛しく、淸廉虛中にして竹の如く、堅く實ち、堅剛正實にして、石の如き故に、其の淸虛堅實の心の德が至然に感應して、此の樣な竹にして、石、石にして竹の淸虛堅實のめづらしき奇物を、招き來したものであらうか、（致は招ぎ來すと云ふ程の意なり。）と疑うて、未だ決せざるの

中に咏歎するの意を含めて、重きを主人虚堅實の心の上に歸して、茲文を結むだのである。（也乎は、順勢虚落之辭と申しまして、文の勢につれて、輕く落し結ぶ時に用ふる字にて、矢張歇語なり。上の豈字と相接應すと知るべし。）

さて、余未レ得二其説一と云ふに託して、石の夢に竹となる竹の夢に石となるか、主人淸虚堅實の心、之を感致する所以かと、返て思ひも寄ぬ所より筆を起して、一篇の妙文字をなしました。此所謂無中に有を生し、死中に活を求むるの法にして、文士の奇想、驚くべし。能々此等の處を玩味せば、筆を下し思を構へて、亦難題なきに至るを得ん。それは扨措、石が化して竹になりたが、竹が化して石になりしか、主人淸虚堅實の心が、之が感致したかは別として、希はくば誰でも、淸虚竹の如く、堅實石の如きの心を持ちたきものである。そうして、竹化石、若し靈あらば、亦定めて德を同しする人を得るを喜ぶであらう。



諸國孝義錄（大和國中）

忠義者庄六

庄六は添上郡、京終村庄兵衛が子にして、郡山の城下藺町の町人疊屋忠兵衛が下男なり。寛延元年より、十年をかぎりて、忠兵衛が家につかふ。しかるに、忠兵衛、眼をやみて、疊さす事を得ず、子供あまたありて、家貧しくなり、夏冬きすべき衣もたらざりけれど、庄六は、主のかげによりて、疊さすわざをまなび得たる、そのめぐみわすれか

さしとて、只忠兵衛が家のたちがたき事をのみなげき、いとまあれど、人にやとはれなどして、そのあたひを主の家のたすけとなし、さきにとらせし衣をも、質物となしたれば、寒き日も、袷きて走りまはりつ。又、この業によりて、二三里へだたりたる所に日ごとにゆく事ありしが、また夜ふかきにやどりを出、夜にいりてかへれど、かならず主の安否をとひ、忠兵衛酒を好みぬれど、つねに求めて、是をすゝむ。主もいたはりて、遠き所にゆき、夜をおかしてかへるもなやましかるべけれど、先のやどりにとまり居て、その業はてゝかへりねかし。もしかはれる事あらば、人をしてしらしめんなどいへど、一夜もかへり候はねば、こころもとなく候とて、夜ごとにかへりき。さて、十とせみちて、親のもとにかへるべきに、主の艱難を見て、かたく庄兵衛がもとにゆきて、ことし季みちぬれば、かへりて、つかふまつるべきを、主のあまりにまつしくおはしければ、あまたの子ども、人とならんまでは、かれにつかへまほしきといふに、親もゆるして、その心にまかせてけり。寶暦十三年十一月領主より、錢そくはくの賞をあたふ。まことや、その比庄六、行狀といへるひも卷の草子をみやこにて、梓にちりはめけりとなり。

孝行者小ゆり

孝行者くに

高市郡觀音寺村に百姓左兵衛といへるもの有りしが、男子はなくて、娘四人もありけり。もとより家貧しければ、妻とゝもに、耕しけるが、左兵衛年々に、目をやみて、ひとつはしひ、ひとつは、おぼろなるに、中風の病をさへかさねて、耕すわざも心のまゝならず、姉の小ゆりといへるに、聟と

りて、年なかはいかりはすきけるが、いもせの中も、おもふまゝならで、出でいゆきぬ。かくては、父の心にかなへる人のあるべくもあらじ。とにもかくにも、他人のいりきたらんには、老たる人の心つかひわりぬべしとて、中のふたりをぞ、外によめらせ末のくにとゝもに、こゝろやすく二親を養へり。是、父の本意にもあれぞとて、そのゝちは、むこをもいれずしてすぎぬ。母もやまひある身なるを、二人して、たすけまゐらせ、いかなる事にもつゆたがふ事なし。左兵衛つひに、目しひとなり、家の内すら立居ならねば、ひとり、厠にゆくこともかなはず。妻をたのみてゆかんとする時も、小ゆりくに、いかなる手わざありてもはしり行きて、これをたすけざることなし。日毎に、かはる〳〵耕しくさきり、より〳〵家にかへりて、倦たる色あれぞ、茶あたゝめ、物すゝめなぞして、

又、田面にゆきぬ。晝はひねもす、夜はよもすがら、里人のいこふ比には、夕げをすゝめ、おやしつまりては、苧うみ、糸くりて、わづかなる代にかへ、外に出れば、何にても、めづらかなるもの家つとにし、父のよはひかたぶきて、後さむき頃は、ひるよるわかず、火にのみあたり居て、冬の初より、卯月の比までは、門邊にも出ることなし。たま〳〵、空あたゝかに、心よき時は、草履つくり、縄なひなぞ、手すさみとなり。是は、父の手づからつくり給へぞ、もつたいなしとて、二人の者は、用ることなく、母にのみはかせけり。縄は、ふかくをさめ置て、年ごとの貢の料となしつ。なくなりぬる後もその縄を手にふるゝ時は、父のことおもひ出で、涙おとしゝとなむ。これより、十一年ばかりさきの事にや有けむ。卯月のはしめに、けふは、心ものとかなり、久しく田面に

もゆかねど、此の世のいとまこひにも、行きてみばやと、父のいへど、二人、かはる〲背おひ、母をも具して、母のくろに、父の腰かけさせ、そのとほりの物語などし、あやしの割子やうの物とり出で、二親にすゝめけり。折しも雨の後にて、土はまたかはかざりしかば、父の手のかたのつきたりしを、天明元年七十九歳みまかりぬ。そのゝちも、其所に竹たてゝ草とりなどし、永きかたみと、しめおきしもあはれなりき。母もことし、七十九になりしが、父なきあとは、殊さらに、いつきかしづき、夜の物とてもたらぬば、ひとへの物も母にきせしとなん。はらからともに、身をつゝしみ、行ひも、又正しくて、年ごとの貢もの、一とせもかゝさりけり。この事をちこちにかくれなければ、同七年五月、領主より銀とらせて褒美せりとなむ。

主従心得草（承前）

諏訪 忠元 寄贈

又一人の女房の咄すを聞けば、わしらは、出來合の夫婦にして、中のよい筈なれ共、少ともよくない。あの人のする事は、私が心にあはず、私がする事は、あの人の心にあはず、常にけんくわばかりして居る。今では、夫婦らしい事は、少しもなし。毎日、いがみ合てばかり暮して居る。何の因果であんな人と夫婦になつたるぞ。と、恨み涙で咄すを聞て居て、氣の毒に思ひました。夫婦かけむかい、水いらずの中に、いがみ合のある筈はなけれ共、夫にいがみ合あり。況や、其の外の寄合人足共は、猶々いがみ合ある筈なり。扨、又、出來合の夫婦といふ事は、終に聞た事なし。道具くひ物牡丹餅なら、出來合といふ事もあれ共、夫婦に出

來合のある事は、終に聞た事なし。是は、どふいふ事かと能々考へて見れば、へついよりも先に女房といふ男と、我が手にお歯ぐろ付くる女と寄合て、夫婦となつたのと見える。夫婦に出來合わるといふは、其の時始て聞たり。長生すれば、珍らしい事もきく者なり。夫婦の事は、人間一生に一ぺんの大禮なれば、親々達相談の上、媒人を以て緣組を致し、夫婦となるが、人間大事の道なり。然るに親の仰を待ずして、私に夫婦約束するは、大なるあやまりなり。天祿を落し、一生貧乏難儀するなり。急度愼み玉へ。近來は、仲人なしの出來合の夫婦多くして、人間一生に、一ぺんの大禮も大に安賣になつたり。是は何より起るぞといふに、むすこや、むすめ共の不埒より起りたる事なり。一切のむすこむすめ共、親のゆるさぬ夫婦約束は決して致すべからず。佛神や、世間の人に憎

まれて、大に福德を失ふ事なり。又我身が道にそむいて居ては、むすこや、むすめのしめしも出來がたし。爾らば子孫迄に災ひをのこすといふ者なり。これによつて、親のゆるしをうけ、よい仲人あつて、夫婦の緣を結ぶべし。是福德安心の道なり。一切の若衆、急度愼むべし。扨、我が手に、おはぐろ付た出來合の夫婦に、中のわるいの、いさかひのといふ事は、なき筈なれ共、後には心がかはつて來て、いやにもなる者なり。川柳が發句にも○目についた女房今は鼻につき。とよんだも此の心なり。初めて見た時は、よい女じや、どうぞ女房にほしいと、手をまはし、足を付け、人頼みして、内へいれてほど過れば、色々な垢も見え、心もうつりかはりて、大切にした女房を、今は鼻であしらひ、麁末にするやうになつたといふ事なり。是は人間のくせにして、大いにわろし。いつ

迄も、中よくくらすやうにすべし。賢人君子の心は、いつ迄もかはらね共、小人愚者の心は、折々かはりて、あてにはなりがたし。夫故に心のかはる事を歌ふ。

いくたびも思ひ定めてかはるらん
　頼むまじきは我心なり
あしきともよきともいかゞいひ果ん
　をり〳〵かはる人の心を

兩行の文字

吉野眞澄

奥山も、端山も、花咲き充ちて、にほはぬ里もなく、かをらぬくまもなかりけり。さても、世には、櫻ばかりうるはしくなつかしきはあらじかし。其の色のたとしへなくうるはしく、其の姿の、優にやさしさは、いふも更なり。ことにゆかしき歴史の上の縁もこそあなれ。いで、其のゆかしき節を尋ねて、かく亂れさきたる花の木かげに、一入の思をそへまし。

抑も、元亨の昔、時の聖主後醍醐天皇には、いたく關東の所業をにくませ給ひ、執權平高時入道をのぞき給はんとし給ひけるに、時や、いまだ至らざりけむ、逆よせによせられて、白波さはぐ隱岐の國へ遷幸し給ふ御事とはなりぬ。あはれ、いとやんごとなき御身にてまし〳〵ながら、かくもいまはしきまが事にかゝりたまひけむは、今思ひ奉るだに、そゞろに、涙せきあへずなむ。

頃は元亨元年の御事なりけり。彌生の七日ばかり、いよゝ、旅路に登らせ給ひければ、中宮、悲にたへたまはず、中門に、御車を差し寄せられ、御涙の中に、

此の上の思ひはあらじつれなさの
　命よされればいつを限りぞ

とばかり聞えて臥し沈ませ給ひけり。

さても、御門には、千葉介眞胤、佐々木佐渡判官入道道譽等、五百餘騎にうちまもられさせ給ひて、七條、西へ、東の洞院を下へ、御車に輾らせ給へば、都の中は、たふとき賤しき、路に立ち塞がりてなげきかなしみ、且は、鎌倉の專横をいきどほりうらみて、憚るところもなくのゝしり、また、聲高になきわめきて、只管、赤子の、母を慕ふが如くなりしかば、つきそふ鬼武者も、さすがに、皆、鎧の袖をぞぬらしける。此の間の御事は太平記の文に詳なり。

やがて、櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡の社を伏し拜み、湊川にゆきかゝりければ、福原のあれたる跡を御覽ぜられて、おごりし平家の事ども思しやられ、印南野の末より、須磨の浦を過ぎさせ給ひ、明石の浦の朝霧に、遠くなりゆく淡路島、寄せ來る浪も高砂の尾の上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を、杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら〳〵と、霞をわけて、やう〳〵と、今宵、院の庄につかせたまふ。

朝、またき、衞士、朝きよめすとて、雪とちりしく花びらを掃きたてつゝ、ふとうち見れば、あやしや、櫻樹の、眞白に削られたる刄のあとに、兩行に

天莫レ空二勾踐一　時非レ無二范蠡一

と、墨くろ〳〵と書きしるしたり。其の意を悟るものもなく、ひたおどろきにおどろきて、みかどに、かくとつけまゐらすれば、御自御覽じて、天が下には、猶、心をよするものもありけりと、黄泉路をたどるばかりのうき御たびにも、いと心

づよくぞ頼みおはしける。

かくも、ふかき憂に沈ませ給へる　聖慮を、たゞ十文字の中になくさめ奉りつる人は、そも、いかなる人ぞ。これは、世に名くはしき、備後三郎高徳なりけり。高徳公は、備後國兒島の人なり。姓は三宅、父は、範長といふ。公は、少き時より、書よむ事を好めり。　天皇、笠置山にのがれ給ひし時、兵を集めて、救ひまつらんとはかりしに　天皇、その志をめで給ひて、錦の大御旗を賜はる。さるほどに、行在守を失ひ、車駕、西の方へと遷らせ給ふときこえしかは、公は、いと口惜しくおもひなし、家族をあつめて云ひけるは、古の忠臣は、身をころして、仁をなせり。己、臣とうまれ、今かゝる世のみだれを見つゝ、たゞにもだすべけんや。義を見てせざるは、勇なきなり。いでや、遷幸の道に、車駕を奪ひまつりて、義兵を興さんとおもふは如何にと云ふに、皆同し心に振ひたちぬ。共に、舟坂山にてまちうけたりしに、ここをば通り給はで、山陰道の方へめぐり給ひしときゝて、また、山路をこえ〳〵て、杉坂にいたれるに、車駕は、はや過ぎさせ給ひしあとなりければ、人々、皆ちり〳〵になりぬ。公は、なほも、天皇に見えて、心のほどをきこえあげんと、おとおひ奉りて、院の荘に至り、夜のまぎれに御館に忍び入り、たわゝに咲ける櫻樹をおしけづり、ちりくる花をかきはらひつゝ、唐紅の糸條を、かくは、大和錦に織り出でたるなりけり。

其の後、天皇、還幸し給ひし時、公は、源忠顯につきて、諸所に轉戰す。堂の峯の戰、忠顯、錦旗をすてゝのがれしに、公、これををさめて去りぬ。足利尊氏、兵を篠村にあげ、遠近の人々、皆走せ加はりし時、公は、之に從ふをいさぎよしと

せず。後、尊氏そむくに及びて、新田義貞と共に、之を攻め、熊山の戰、公、重創を被りて、立ち得ぬまでになれりしに、父の訓にはげまされ、遂に敵をやぶりぬ。後、北越に走り、また、四國におもむき、男山陷りてより、行末しれずになりぬとぞ。左に、一篇の遺書をかゝぐ。一讀すれば、以て、公の生涯の抱負のいかなりしかを知るにたる。

芳野拾遺物語巻第三兒島備後守こしの國より文の事と記したる條に云ふ。いにしきさらぎのころ、こしま備後守高のりのもとよりの使とて、たつね來れり。ふみいとこまやかにおもひそのべて、たくましくかきたまひてけり。其の中に、さても、世はおもふにかなはぬさまかな。いつれの人かも、君に忠をつくし、御敵をはろぼしたまひ、一統の御せいたうをあふがんとのまことをのみおもはぬはなし。高德いやしくも、先帝の御爲には、もろこしの紀信が義にもなそらへ子房がはかりごとにもおとらましなど、つとめてこゝろはかりいさきよく、わけくれ是のみはかるといへども、御運つたなきにや。其の事ゆかで、やゝもすれば、みかたによからぬ氣ゐなどいましして、いと口をしく候。こしの土にもなりなまし。さても、年ごろのよしみわすらるゝまもなく侍れども、いくさのために、明ればにしひがしにいそぎ、くるれば、きたみんなみにはしり、いとまには、たかきいやしき一所にあつまり、せくゝまるはかりごとより外には、他事もなし。さればとて、むかし契しまじはりをわするゝにはあらねど、おのづから道のほども、敵のためにさしふさがれぬれば、こゝろしくとふらふべくもあらず、ひとへに生をへだてる

ばかりなげき侍る。其のたよりとても、まれまれなれば、うへにことなる御事もましまさぬにや。人々はまめやかにつかふまつり給ふにやといと心ならず、いぶかしくてなん侍りて、いつしかうつりゆくとし月にと、何事もおとたえたる世のさまなるに、御うんもそれになぞらふべきにやと、一かたならぬさまのみ、よろしくはかり給ふべし。八苦のきやうかいは、高きいやしきへたて侍らねど、其の外のいたはりかそへつくしかたうおほえ侍る云々

二月甲戌　　兒島高徳

隠老机前



一種物合（二）

九月廿三日於和學所執行

物判者　小中村清矩

歌判者　横山由清

一番

月

左　歌詠

嘉應の住吉歌合に、社頭月といふ題にて、後徳大寺のおと〻の、むかしもかくやすみのえの月、といふ秀歌よみたまひしを、大神も感應ありし故事によりて、月の形したる圓櫃に、かの浦の松かきて、木綿の色なる組もて結ふ。みる色の地しきに、波をかき、菊のうはさし〻たるは、おまへの濱の、秋をおもへるなり。さて、櫃の中にいれたるは、おのれ、この道を、執するのあまり、椿餅の八千年も、かはることなく、か〻るまとゐの、絶えずあ

れかし。と祈り申になむ、歌は、金の泥して、波の上にかく。

かりもなき菊もにほひてめでたきは
月すみよしの浦のあきかせ

右　物詣

苔色の地しきして、高つきに、もえきのきぬもて、山のかたちをつくりたるに、松もみぢ、ところどころにたてり。その梢に、鏡をかけ、やまの裾に、紅葉のかたちしたる、菓子をおきて、それを、地しきにも、散りみだれたるさまに、しなして、銀の泥して、歌をかけり。古今集に、秋の月、山べさやかに、てらせるは、といへるに、おもひよれるなり。

てりまさる月のかつらのもみぢ葉は
ちるかげさへにさやかなりけり

物判云、左、此の題は古事もさま〳〵あるべきを殊更に、嘉應の歌合をしも、とり出られたるば、むかしもかくや、と眞心より、うたひしことの葉を、大神もめでたまひけむ、住の吉の浦なみ、なみ〳〵ならず、めでたき跡なれとて、並木の松の、影より高き心しらひに、おもひよせられたる事とおぼえて、壹番の作り物には、いとつき〳〵し。組糸の白ゆふ、かう〳〵しく、地しきの色の、みる目もあやに、菊のうはざしにはひあひて、殘るくまなきこゝろ見えたり。右も、をかしきふる歌の、さまによりて、高松の、梢さやかに、作り出られたる、深山の秋の月影には、心うつさぬ人もあらじ。紅葉の錦、色ふかゝるも、此のころの折にあひたれば、ここながら、尾上つゞきたどり行く、こゝちせられて、げに此のこけのむしろに、ちりかひたる、其のかずもさだかに見ゆるぞかし。ともに凡な

らぬ、しわざの、いみじともいみじければ、末練の判者、いづれとも定めまどふ中に、右は一種物を、たゞちに古歌の心に、取なされたる、殊に心きゝておぼゆれは、住の吉の神の、おぼさむはどは、かしこけれど、例にたがひて、右を勝とや申さむ。歌判云、左、春の海べにてよみけむ、伊勢の物語の心深さも、おもひけたるむかりに、おなじ雁と菊とをとりいでゝ、月すみよしのとうたひかへられたる、げにこの道を、深く執せらるらむほど見えて、凡俗ならず承る。右、數をみよとか、とある古今集のふる事を、わがものにとりなして、心も詞も共にやすらかなる、上手のわざと見ゆ。どり〳〵にとも申さまほしけれどかゝるいどみわざのはしめのつがひ持ならむも、興なかるべければ、例にまかせて、左の秋風立まさると申す。（未完）

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の三）

白松園主人

高倉天皇の御宇、狩野介工藤茂光の讒奏によりて、大島なる爲朝を討たしめられければ、爲朝死を決して、最期の軍をせんと出でたちける時、つと床几をはなれて出さまに、簓江を見かへり、われ今磯方に出て、敵の分際を見んとおもふに、爲頼には最期の用意をさせよ、島君はいと稚くて、殊さら女子の事なり、又簓江は、忠重が女兒なれば、敵も眼なかくべからず、とかくに生きのこりて、なき迹をも弔へかしと宣へば、簓江涙さしぐみて、世にも君にも疎まれたる、父忠重が故をもて、惜からぬ命を助けらるゝも、何の面目か侍るべき、君もろともにこの磯の、濱に屍を曝すこそ、願はしく侍るとて、おもひ定めし氣色なるを、……

爲朝は、既にかく諭しおきて、敵に向ひぬ。「彭江はいふもさらなり、爲頼も島君も、なか〳〵にわろびれず、父うへはやく歸り給へ、あまりに敵を侮りて、過なし給ひそとて、目送る親子主從の、これぞこの世のわかれとも、しるやしらずやしらま弓の、杜仲の露をかき拂ひ、やがてぞ見えずなり給ふ。」かゝる折にも忠臣鬼夜叉は居殘りて、彭江を諫めて落させんとせしに、

彭江はこれを聞きて、頼もしき人の志かな、稚君姫君は、おひさきある御身なれば、父上ともろともに落しまゐらせん事願はしけれど、わが身は從ひ奉りがたし、父のよからぬ心ゆゑに、いく度か君に疑はれ、今またこゝを脱れんは、命惜しさに御身をこしらへ、さしもに勇き御曹司にさへ、敵に背を見させまゐらせし、と人にも云はれ、君にも思はれ奉らんは、いとくちをしとて立ちもあがらず。………

彭江が人となりは、飽くまでも眞摯なり、熱性なり、おほかたの婦人、特に明治の婦人は、理窟を知りて賢女ぶらんがために、形而上に超然たらんとし、却りて形而下に墮落する者多し。馬琴が描く所の婦人も、賢女としいへど、儒者流義の固執によりて、常に人情を遠かり、其の極、動もすれば慘酷に陷る事あり。然るに、此の彭江ばかりは、人情に生れて、人情に死し、血あり涙ある眞個貞操婦人にして、徹頭徹尾一言の以つて難ずべき點なく、肺腑より出づる處、悉く金玉の言となれり。嗟、誰か此の婦人の性格をもどく者ぞ。もどく者は必ず、我が國の歴史を知らざる、さかしら者なるべし。嗟、彼は遂に何をかなす。鬼夜叉は彭江の答をもて、自分一己の名聞にて、忠義とはいひがたしと激しゝかど、彭江も理の當然に、重ねていなまんやうもなく「げに思ひ誤り侍り。わが心もて、御曹司御父子を殺し奉らんや。ともかくも、君の御爲よからんやうに、計ひ給へ」と直

に我が非を曲げて、忠臣の言に從へり。然るに、天は遂に、此の孝女たり貞女たる鬖江を殺せり。即ち、折から寄せ來れる敵船の案內者として、眞先に進みたる島主忠重（鬖江の父）が船を、爲朝は一箭に射て沈めたりとの注進に、鬖江は胸碎け心消ゑて活くるに忍びざりき。

鬖江は、この注進を聞きて、出でんとしたる足もすゝまず。あな無慙や、わが父は、身の惡報とはいひながら、終に君の矢先にかゝりて、底の水屑となり給ひぬ。それには勝りて彼男が、磯方までも御供し、今又注進いたせしは、めでたき志なりと嗟嘆して、はふり落つる涙を押むひつゝ、鬼夜叉にいへりけるは、寄手御曹司の弓勢に怕れて、陸に上り得ず、君の歸り來まさんに程もあらじ、わらはは君の御供して、船に乘べう思ひ侍り、御身は先づ稚君姫君を扶け引きて、船に乘せまゐらせたまへ。稚きは走りまはりも自在ならで、後れ給ひては便なし、とくとく急がして、爲頼の袴のそばを引揚まゐらせ、島君の襟に、錦の護身袋をかけなどすれば、鬼夜叉その氣色を見て、さてはこの婦人、父忠重が死せしと聞きて、君にも附かず、父にも附かず、いよく必死を究めたるよと暁得しかば、一際にも及ばず承引て、島君をかき抱き、爲頼の手を引きて、走り出づるに、ふたりの稚子はしばく見かへり、鬖江早く（鬖江は父の側女なれば母とは云はず其の名をいへり）父上の御供して、來給ひてよと宣ふにぞ、いとゞ胸のみふたがりて、はかばかしくは得應へず、ふしまろびてぞ泣きにける。

斯くて、鬼夜叉は、爲頼島君及び爲朝をも諫めて、落しやり、再び舘にはせ歸りて見るに、鬖江は只ひとり、香を燒き經を讀みて居たりけれど、云々の由を審に物語りけるに、鬖江が深くよろこびて、いへるやうは、

今ははやこゝろ易し、惡人なれども父は父なり、さればとて父に從ふときは、君に忠ならず、君に從へば不孝なり。さてもかくても、鬖江が、けふは死ぬべき日なりけり。と思ひ定めて稚子たちのみを、船に乘せまゐらせし、心のうちを猜したまひて、いみじくはからひ給ひけるよ。名のみ聞きつゝ逢ひ見ねど、御身の息女はよき親を、持ちたまひぬれは身も廣く、樂しきにつけ憂

いかにつけ、君も不便におぼすらめ、わが身もおなじ側室にて、給事も十年にあまり、産せたまひし御子たちも、三人までおはすれど、頑なる父ゆゑに、みづから墜ちて殘りとゞまり、けふの船出を外に見る、さて味氣なき身の果ぞ、さこゝろのかぎりかき口說ば。…………

その臨終のとき、鬼夜叉之れを介錯するとて、

彪江が後方に立ち、見れば三十にまだ足らぬ、姿の花は匂やかに、かく賢なるは洛にも、ありやあらしに島山の、稚木を無下に枯らすかと、思へばわれもひとり子の、長女が面影眼に見ゑて、猛きこゝろもよはり果て、涙は盡きぬ本の露、末の雫さなるまでに、…………

彪江の事實は、此の處にて終を告げたり。所謂三寸息絕ゑて、萬事休せる者。讀者諸孃、讀んで如何なる感をかなす。余はこれより、琉球王の王女寧王女及び廉夫人の性格操行を論ぜんとするに先ち、暫く讀者に紹介する者あらんとす。

弓張月のうちにても、爲朝が崇德院の御墓に詣でし處は、實に千古の名文なり。もとこれ上田秋成が雨月物語より脫化し來れる者なれども、かくまでの換骨脫胎は、馬琴に非ざれば再び得がたし。こは誰もよく知れるなれども、まだ見ぬ人の爲にいふなれば、就きてその妙を味ふべし。さて又、爲朝の子朝稚が、下野を出でゝはるゞ筑紫に赴き、雁回山といふ山に父を尋ぬといふ處、尤も哀ふかし。路に從者時員といふ勇士、俄に病みて賊の爲に殺さるゝわたりを始めとし、從者の仇を刺して、料らずも父の嫡妻白縫に逢へるところ、哀に悲しく、人をしてそゞろに落涙せしむ。優美婉曲の筆を揮ひ、微細に其の狀を寫して、意至り筆之に從はざるはなく、筆端實に神ありといふべし。少しく餘談岐路に亘る嫌はあれども、默止さんはわびしりに心うければ、序にその文字を紹介す。先づ孝子朝稚が、旅狀の景を叙して曰く

山を踰え、海を渡り、夜に宿り日に歩み、主從後に、たち先になりて、ゆきゆくほどに、思ひのほか遠く來て、筑後と肥後の堺なる、宮原といふ田舍を過ぎり給ふ。

「ゆきとゆくほどに」ほどにといふは馬琴が熟語ともいふべき、接續詞なり。彼が水滸傳を譯せる中にも

九紋龍史進は、少華山をたち出で　、關西の渭州をさしてゆく程に、或は足曳の山をこえ、あるひは玉鉾の道にまよひ、夜はものすごき林に宿りて、在明の月をながめ、晝は險しき谷を涉りて、夕つく日の影にさまよひ、………

とあるほどにの如く、長途の旅景を描くときは、常にこの文法を用ゐたり。云ひさしおきて、中止法ともいふべき處なるが、語氣迫らずして、甚だ雅致あり。

さて、此くの如き長途の旅の空に、今とし十三歲なる朝稚は、杖柱とも賴める家臣の、俄に病に苦めるによりて、いたく心を惱せり。此のところ讀みもて行けば、そゞろに涙さしぐまれて、腸も斷離れんとする心地せらる。

筑後と肥後の堺なる、宮原をうち過ぎて、阿蘇のかたへとゆくほどに時員、俄に心痛して、心地死ぬべくおぼえしが、みづから志を勵して、後れじと歩めども、千々の剛敵を見て、屑とせざる勇士も、病には勝ちがたくて、動すれば後るゝを、朝稚見かへりて宣ふやう、やよ時員、汝が氣色、今朝より惱ましげに見えたるが、顏の色もますくわろし、臥房あらはなる旅寐して、夜の衣るへ濕ければ、風邪に冒されたるにはあらずや、しばし彼處の樹の下に憩ひて、保養せよかしと宣へは、時員は杖を植て息を吻き、僕この二三日は、心地例ならず候ひしが、かくと申さば稚君の、さこそ便なくおぼすらめ、翌はおこたり果てんかとて、病を推してこゝまでは參りしが、病苦頻りにいやまして、いかにともすべなし。されどしばし立ちやすらひて、神を鎮めなば、今宵の歇まで、やはゆかで候ふべき、こゝろ易くおぼしめせかし、といふも苦しき氣色なれば

嗚呼之れを聞きて、誰か驚き憂ひざらん、況や秋蘆、生ひ茂りて人里遠き入江なれば、只さへいと

ど、物凄きに、十五に足らぬ少年の家隷の病むとし聞かんには、心細さはいかならむ、思ひやるだに、酸鼻の至りならずや、乞ふ下に出せる沈痛流麗の文字を讀め。

朝稚聞きて驚き愁ひ、かゝりせば、昨夜の宿りに逗留して、醫師にも診すべきものを、このわたりには湯を乞ふ家もあられば、何ごとも便なし。夕露はふかくとも、まづ樹の蔭に憩ひてよ、と信やかに勸りて、茅萱かきわきつゝ、笠を圓座にして、時員を居らせ、懷より藥とり出でゝ、飲したまへば、時員感謝に堪へずして、不覺に落涙し、旅なればこそ、稚君に、草の褥を布し奉り、手親くすりを賜ること、冥加にあまりていさかしこし。下野を出で給ひしより、露に宿り風に梳り、長汀曲浦に雁が音を聞きては、故郷へ還らん玉章かと見なし、夕を送る鐘の聲、雨に曇りし遠樹の陰、腸を斷ちたまふなるに、孝行世に勝れたまふから、これをば憂しともし給はず、歩み疲れては、青塚の下に佇立、路遙にしては、紅日の影を惜み、出づるにも入るにも、時員を唯杖とも柱とも、たのみおぼすに、いひがひなくも病煩ひて、却て稚君の御勞を、受け奉ること苦しけれ。さがき口說つゝ、強てあるかんとするに歩すゝまず、げにや常なき世のたゝずまひは、今更驚くにしもあられど、わが身もしこのまゝに、黄泉の人となるならば、翌よりは稚君の誰をよすがにゆきもしつ、還りもしたまふべき、あな痛ましやといへはねに、いはねど氣色にあらはれて、憂に迫れは病着の、重き首をあげかねる、小草の上にふしまろべば、蝗三ツ四ツ飛び出てゝ、裾のあたりに鳴虫の、聲も忽地絶ねたりける。朝稚見るに淺ましく、抱き起して背を撫で、時員こゝちはいかにぞや、そなたが死なばいかにして、この長旅をひとりせん、かゝる病は氏神も、救ひ給ふによしなきか、もし主從が忠孝を、神も哀と見そなはさば、驗見せ給へと祈念しつ、心ぼそげに見ね給ふ。時員は身の苦しさより、稚君のおん往方、さやあらんかくやあらん。とおもひやる程胸くるしく、やうやうに頭を擡げ、時員いかでか死ねべきぞ、本あらば掬びあげて、飲まばやとおもへども、これさへ思ふに任せず、といふに朝稚こゝろを得て、葉末の露を揮りよせつゝ、紙に濕して絞り入れ、時員に飲まし給へば、これが末期の水ならん、とおもへばいとゞよわりゆく、こゝろの中に掌を合せ、物体なやともいひかねる、苦惱は固に

彌作したり。嗚呼之れを讀むもの、誰か聲を呑んで泣かざる者あらむ。誰かいふ、明治の小説界は、超然として昔日の比にあらずと。しかも再びとだにくりかへして、讀むべきほどの小説の、いでざるはいかに。妄りに大言せざれ。馬琴の文章は、誦する事幾回なれば、趣味益々ふかく、人の志操をして勤めて高尙にせしめんとせり。其の光彩と其の碑益とは、蓋し眼ある者は、問はずとも知れるならむ。わはれ、馬琴ほどの手腕を有する人は、文運の隆昌古來嘗てなき、明治の文學界といへども終に如何ともする能はざるか。

（以下次號）

消息文二十種

隨巷生

（二）德川家康より秀忠におくりし文（孫の養育について）

家康秀忠のとは、今更に、いふべきにもあらざめれば、はぶきつ。文中竹さあるは竹千代さて將軍家光、國さあるは、國千代さて、後に、駿河大納言忠長さいひし人の幼名なり。

一筆申し入れ候。まづ〳〵、日増暖氣になり候て、暮し能く候。其の御程、彌御無事に、若達も、息才に候や。承はり度候。冬年は、緩々御目に掛り、悅び入り候。其の節は、何角、御兩所の御世話ども、老後の樂みに御座候。能々、此の段、表へも賴み入れ候。

一竹、國、殊の外成人、悅び入り候。夫につき、先頃、其の地に參り候節、竹へ付人の事、申付けられ候樣にと、申置き候。定めて、申付けられ候

半と存じ候。
一國事は、一體、殊の外、發明なる生付にて、重疊の事に候。其の御方、別して御秘藏の由、左樣これあるべき事に候。夫故、存じ寄申入れ候間、能々御心得、生立ち候樣なさるべく候。
一幼少の者、利發に候とて、立木の儘に育て候へば、成人の節、氣隨我儘者に成り、多くは、親の申す事も、聞かぬ者にて候。親の申す事さへ、聞かぬ樣になり候へば、召仕ひ候者の申す事は、猶以ての事に候。左候へど、後には國郡を治め候事に、捨置き、身も立ち申さぬ樣に、成り申し候。一體、幼少の節は、何事も、直成る者に候まゝ、如何樣に、窮屈に育てゝも、最初よりの仕付次第にて、外より存ずる程には、大儀にもなく候。これを、植木にたとへ候へは、初め、二葉にかい割り候節、人の產立と同じ事故、隨分、養育いたし、最初、一二年もたち、枝葉多くなり候節　添木致し、直になり候樣に結び立て、其の內に、あしき枝はかきとり、年々、右の通、手入れいたし候へば、成木の後、直なる能き木になり申候。人も、其の通、四五歲よりは、添木の人を付け置き候て、あしき枝の我儘に育たぬ樣にいたし候へば、後、直によき人となり申候。幼少の時は、育さへいたせば、よきと心得、我儘にいたし置き、年頃になり、急に異見いたしても、我ままのあしき枝ばかり繁り、本心本木は、うせ候事故、直り申さず候。是には、今以て存じ出し候事これあり候。三郎出生の節は、年若にて、子供珍ら敷、其の上、ひかいす故、育てさへすれば能と心得、氣のつまり候事は致させず。氣儘に育て、成人の上、急にいろ〳〵申し聞け候へども、兎角、幼少の時、行儀作法、ゆるやかに捨て置き候故、親を敬する

事を存せず。心安く存じ申候て、後には、親子の爭ひの樣になり候て、毎度申しても、聞き入れず。却りて、親を恨み候樣に、なり行き申し候て、夫にこり申し候まゝ、外の子供は、幼少より我等の前にて、行義作法、よく仕付け候者へ、申付け置き、若、少しにても、不行義我が儘の事は、我等へ隱し申さず、速に、申し聞け候樣、申付け置き候て、承り置き、我等前へ出し候節、毎度、或は叱り、また、是の樣にはいたさぬものぞと、一々申し聞け候故、影日向なく、直に育て申し候。第一、親をこはく存じ候へど、愼よく幼少より、親へ孝行にいたし候事、覺え申し候。其の上、小身ものと違ひ、召仕ふ者の申す事を、能く承り候樣にいたし候事、專一に申し聞け候事。親のゐる内は愼みても、親の居ぬ時節になり、我儘に成り、國郡を失ひ候者、古より多くこれあり候。兎角、常に、側にて召仕ひ候守の者、第一、孝行と、天命と、下へ慈悲を掛け、武家の事、幼少より申し聞け置き候へど、自然と、身持よくなるものに候。君臣と申す事は、定りし事に候へども、君たるものは、臣君と心得申す事專一の由、我が幼少の節、安部大藏、毎度申し聞かせ申し候。尤、臣として、君に仕へ候事故、如何樣に無理なる事をも、是非なく承り、無道の君へも仕へ候へども、夫にては、まさかの時、用に立たぬものにて、兎角、上よりは、何事によらず、慈悲を掛け、贔負偏頗なく、賞罰正しく、臣を君の元と心得候へどよく候。臣ありての大名なれば、召仕ふ者なくては、大名の詮はなく候。兎角、幼少の者には、召仕ひ候者の申す事をよく〳〵聞け〳〵と、常に御申し聞かせなされ候事、專一の事にて、人は、人を鏡として、身を正し候外はなく候。我儘にて、

終に、我が願望の叶ふ事、決してなき事に候。
第一、我儘にては、親を恐れず。親に見限られ。
第二、親類にうとまれ。第三、朋友にうとまれ。
第四、召仕ひ候ものにうとまれ。第五、我が身願
事、悉く叶はず。
右五ヶ條の通なり行き候へども、身を恨み、天道を
恨み、後には心亂るゝより外これなく候。唯、幼
少より、ものの事自由に成らぬ事、能々心得度事に
候。
一太名は、惣領は格別、次男よりは、召仕の者同
樣に心え候事、常に申し聞かせ、育て候時より、
能々心得候樣、呉々申さるべく候。惣領より、次
男の爲せい強きは、家の亂れの元に候事。
一幼少の節、萬事たはやうに、輕き者の物云ふま
ねせぬ樣に心得候事。夫とも、餘りおはやう過ぎ
ては、却りて下の情にくはしからず。慈悲の心薄

く成り申し候。常々の遊びに、國の名產のこと、
或は、大名の家筋家柄の事、並に家來ども、あれ
ば、何の代よりの譜代者、何の節手柄、何の節高
名等いたし候子孫抔と、咄し致候へども、幼少より、
家中の者、如才にならぬ事共、聞き覺え候故、成
人の後、自然と仕置行き屆き申し候。大名の、自
身にたしなみ候事は、弓馬第一、鎗、長刀、劍術
も心得すべき事。若、心なくてはならぬ事に候。
一學問は、大名自分、博學に成り候に、及ばぬ事
にて候。學才これある者に、常に、其の道の講釋
承り、其の外、物の義理善惡の事、行作の能き
人の行義作法、名將忠臣の事、佞臣主の心をくら
まし、其の國を亂し、代々の國郡を失ひ候事ども、
常に承り置き、我身の曲尺ゆるまぬ樣に心掛け
候事、第一に候。
一兎角、人の道は、五常を守るに止まりて、其の

外に、我が身の鏡なくては、何事も知ぬものにて候。常の鏡と違ひ、外より磨く事はなく、我が心をこゝろにて、磨き立て申し候事。我が身の行のあしきは、鏡の照さぬゆゑにて候まゝ、其のくもらぬ樣に致し候事は、常に、身の行ひの善惡を、悦び、其の座に其の惡を改め、善を告ぐる者へ、褒美を遣し召仕ひ候べば、次第に、鏡はてらし、身の善惡は、其の席にて知れ、家中の善惡、民百姓の取沙汰、居ながら知れる事にて候、身の善を聞く事を好み候へば、佞臣共、氣に叶ひ候事をかり、いふ樣に成りゆき申し候。身の惡を聞く事を悦び候へば、忠臣は日々に進み、忠言を聞く事は、一身の行ひにて、天地の道に叶ふ事に候。此の所、主たる者の第一の事にて候。召仕ひ候もの利口にて、氣てん者、取入處にて候。何事も、正直なる者を撰み、召仕ひ候事、第一の事に候。

一井伊兵部事、平日言葉少く、何事も、人にいはせ承り、居り、氣重く見え申し候へども、何事も、了簡決し候へば、直に申す者にて、取分け、我等のなんぞ了簡違ひか、評議違か、爲にならぬ事は、皆人の居ぬ所にて、物靜に、善惡を申すものにて候、それ故、後には、何事も、先、内相談致し候樣に成り申し候。一身の嗜の事、人々、すきゝらひ、得手不得手これある事にて候。兎角、物のかたよらぬ樣致し候事、譬へば、四季の花、いろ〳〵さま〴〵に咲き候て、何れも、詠めこれあり候。どくだみと申す草花は、香もあしき者にて、何の用にも、立ち申さぬ草のやうなれども、濕の藥には、煎じて用ひ候へば、藥にて候。其のごとし。何藝も、人の覺え候事は承り置き、何ぞの時に、入用の事有るものに候。

第一、自身に不得手の事は、人のいたすも、いみ

嫌ひ候者、まゝこれある事に候。夫は大名の、別けて致さぬ事に候。我等、中年の頃迄、碁を一向に存せず。人の打つさへ、不用の者、氣づまりにて、用にもたゝぬ事とばかり存じ、人の好み候は、虚氣者の様に存じ候所、近年碁を覺え候へど、雨ふりの徒然に、慰にも成り、先達て、うつけ者と存ずるものを、相手に致し候。是にて察し候。何事も、詮のなき事は、古より、いたし置かぬ事に候。くれ〳〵も、自分氣に入りし者を、善と存じ、氣にいらぬ者を、悪と存せぬやうにいたすこそ、専一の事と存じ候へ。唯、身の智惠の屆かぬ事、朝夕に存ずる事にて候。

（未完）



茶話それ〳〵草（承前）

木崎得玄

旅人問て曰く、人家も見えぬ此の離家に、獨り湯を煮て、何面白きや。翁笑て、我は茶事をもて、人につかふる身にもあらず。只心にまかすのみ。又問はされ共面白く思はではならざる事なり。其の面白とは何を差て面白と思や。翁云ふ先きに珠光紹鴎あれども、茶事の盛と云は休居士なり。其の居士、今再生して、かくの如く、居前に直り、面壁すともおのづから、茶の點べきにあらず。茶杓を取て、茶をすくひ、檜杓をとりて、湯を汲ひ、其の杓をとるも、おのづから、手のゆくにあらず、是を取らん、かれをかくせんと思ふ氣より、手は、手の用を辨ふ。左あれば、氣より外におもしろきものは非ず。旅人成程面白き事なり。我茶の爲にもやと、近き頃、或る禪師に參謁して、法を聞く

に、只今翁の一語も、則禪味なり。さすれば、茶道は、佛の道に近きものなり。是我志ざしも、彌增し侍ける。翁言ふ、茶道が、佛の道へ近きの、遠きのと言は、少しさとりたる樣に聞えて、かへりて、合點のゆかぬと言ふものなり。佛の道が數奇ならば、一日も、早く佛の經を讀がよし。若文字よめずも、其の御經を一つ二つとかぞへても、外のものかぞふるに非ず。則佛道なり。又佛の御心に叶ふかなはぬと言ときは、森羅萬象、善惡ともに佛の心に叶はぬと言ものもなく、叶ふといふものもなし。其の物々皆用ゐやうならん。今、其の方妙喜菴の茶席見に徃るゝも、面白き事の亦、面白からぬことなり。江岑仙叟已來は、不レ知、宗易宗旦などの物數奇は、其の所の松柏、老茂る歟、又は、小高き樹木もなき庭、或は、其の邊の構なる所、又は、寂寞たる所、夫々にたよりて好みたる茶席なり。今の妙喜庵路次は、勿論、其の外、夫々も古へのさまにはあらず、左あれば其の茶席見る所なし。夫共天井の高さ、窓の寸法杯と言ふ、人は、一向何も知らぬ沙汰にして、寸法斗り寫し歸りて、何の役に立ぬ事なり。併、此の心を用ゐて見る時は、則見る甲斐あるべし。彼是言内に、今日も暮に及びたれば、此庵に投宿ありて、妙喜庵は、翌の事にし給へと、枕片手に、是が伽になり申べきやと、夫々草とよべるいさゝかなる草紙を差出しぬ。

（未完）

かへらぬくり言（上）

鹽井ふく子

とく歸りまたやながめん櫻花
しばしが程の旅ねとを知れ

しばしが程ぞ、強勉しつゝまてやとて、去年の四月、卯月とは云へど、今の暦にて、朔日、やうやう一木二木の花の春に、父の君、母の君と、兄上に迎へられて、大町の一家と、出雲の國に旅立ち給ひぬ。かねて、子を思す厚き御心に、やがて一年も別れ給ひ、殊に兄夫妻の兩親を思ふあけくれの心など、告げこす人さへありしものから、花の盛をも待たせ給はず、住み馴れし都をあとにして、天ざかる鄙のはてをもいとはれず、いそぎ旅立ち給ひぬ。路の程も急がせ給ひて、滊車も急行を撰び給ひ、かねて志し給ふ伊勢の大御神への參詣も歸るさにとゆづり給ひて、いそぎにいそぎて、兄の君の迎へに應じ給ひけるも、思へど一日も多く、子に養はれんとの思召なりけるか。

妾は結髪しのみにて、夫にも別れたれば、さらぬだに、子に迷ふ親心、かなしがり給ひて御めぐみをうくる事も他にまさり、御膝下を離れまゐらしゝも、數はあらぬものから、たゞさびしう、なつかしうのみあこがれ、御かへりの日を、あけくれにまちわびにたるも、今更思へば、父君が世を去り給ふ日を、いそぎまちにたるかとくやしかりけるよ。

戀しき風も、馴るれば身にしまぬものと聞けど、おのれは、別れ奉りしころよりは、いよ／＼戀しさまさり、一日は千代、二日は八千代の思ひにあこがれ奉れば、親はなほ、一層埋れんには、共に出雲になど仰せこし給ふも幾度、其の折り毎に、飛びも行かまほしう、心もかけりぬるを、汝行かば、姉は如何にかする、へだてなく語らふ伴もなくなり、殊に、父母も同胞も都を思ふふし少なくなり、御歸りもいつとも別ずなるはとの御言の葉きくもまたかなしく、さては、師の君にたゞして

事を決せんと。行きてとひ奉れば、往くなと仰す。人に問ふも同じ言の葉なり。自からもまた狂へるか、迷へるかのやうに覺えて、やう〳〵に心を靜めてもなほえこそ堪へざりしか。

かやうに、くるしき思ひするも、父母が生前にうでをみがき、御心をも安め、人言ならぬ眞實の御めは言葉にあづかりたさのみと思へば、大晦日もいねず、元日も、日ののぼらぬ先きに、近きほとりの牛天神にまゐり、他事なくつとめられん事をいのり、歸るさの日の光り、實にうら〳〵かに、春立つと思ふ心にやと、思はず四方を見わたしたり。明日こそ試筆の日なれど、我は今日、人に先きだち、書きそめんなど思ひて、いそぎ家に歸れど、家の内はいとくらく、雨戸はこと〴〵くくり、寒けれど障子もあけはなしたれど、日の光りは少しもさし入らず。父母居まさで、かやうにくらき思ひもすまじなど心さへかきくれて、屠蘇祝ふ心もなく、そのまゝうつぶして、しばらく泣きたりしが、不吉なりと人にも怒られ、自も叱りて、やうやう雜煮など祝ひたれど、味ひもなく、又試筆の心もうせ、とかく思ひむすぼれたるも、凶年のしらせにや。はた、妾が不吉を招ぎしにや。姉君もくやしく思ひてか、かりのたよりに、此の事の給はすれば、身は切らるゝばかりに覺えぬ。

愚痴は心のひまより起るものぞ、いたづら事思ふひまに、學びの道をこそ尋ねめとて、圖書館などに至れば、父君につれられし事など思ひ出でゝ、此處にも、そゞろかなしく、日もくれ方歸れば、去年のくれなりき、月の光りに、顏はさだかにわかねど、父君に、鬚もすがたもよく似たる人に行きあひ、何となう身にしみて、いつまでもうしろかげを見送り、さならずと知りつゝ聲さへかけん

として、泣きて歸りしが、そのほとりにかゝる頃には、いつも、其の事思ひ出でゝ、かなしかりしよ。今も、なほ、其の影のおぼろにうつるもあやし。

日來、父君も、母君も、いと壯健なり。住みなれぬ鄙に、時候も、飲食の物もかはれど、老人には、少しも替りたる事なしとの日來の御たより、まづは心安きふしと思へど、なよやかなる青柳の、いとの反つて、雪にうちふすのみ。千代のためしにひかれたる岩根の松こそ、中〳〵に雪に折らるゝ事もあれ。たのまれぬ露の身と思ひながら、朝毎に必ず占ふ夢にも、つゆ昨日今日の父君の御身の上とも思はず、あやしき事を見ても、思ひねとうちけし、身にしむるふしありても、心のまよひとうちすてたる二月の三日、節分の日、妾は如何にも心さびしく、かやうに祝ひ日と云ふ祝日、心の

かなしきは實に不吉、いで身をきよめ、心をきよめんものとて、ふろに行きて歸り、寢ねて、ばくに喰はさんと思ふ折しも、電報、されど、我名あてにもあらず、しかも、昨日とゞきし父君が御文にも、相かはらず壯健としるしありたれば、夢、父君の凶事とも思はずありけるに、思ひきや。父急病、マサヲとありたり。何マサヲ、正男、兄上よりにや、字の違へるにはあらずや。さし出せし方は何所にや、とて見るに、出雲簸川とありたり。さてはとおどろく折りしも、又や電報、父死す。なげきて母のうれひをますなとあり。あきれて、ただぼう然、夢とも現とも思ひ分かぬ折しも、又や電報、さてはよみがへり玉へるにか、はた、母君のつゞきて果敢なくなり玉へるにかと心も、心ならず、いそぎよむに、今は雪深く、くるにたよりわろし。あきらめてこずや。いかに、返事まつと

ありたり。さては、よみがへりもし玉はざりしか、如何で〳〵、あきらめられん。母君は如何にし玉ふ。行きて母君の御顔を見ずば。心も身もすわらじ。雪深しとて、ふみも通ふものを、如何にしても行かまし、すぐにつれ行きてと人に乞へば、今は夜も深し。明日の一番滊車にて立んとあり。それより伯父。伯母の所に人を走らせ、もはや荷物つくる心もなければ、人のつくるまゝにまかせ、衣服もかふる氣なければ、そのまゝ、夜のあけぬに人をいそがせ立ちぬ。しのゝめの空おぼろに、何となう夢心地なれば、夢にはあらずや、うつゝならんかと、たどり〳〵行くまゝに、遂に夢ともさめずして、停車塲にもつき、日もさし出でたり。叔父も來りぬ。むせびて物も云はぬを、なげくは道理なれど、とても、かくてもかへらぬものをといさめつゝ、共にむせばれぬ。とてもかくても帰へらぬと云ふ言のいみじう我が身にはしみて、いよ〳〵涙こぼるゝを、汝がさやうに心細くては、母御は何とかする。隨分わづらはぬやう、身をもいたはりてこそ行くかひもあれとの叔父の言葉に、げに、母君の御前には、涙はこぼさじとはやく心をいさめつゝ、船、車にゑひし時の用意に、藥をもとゝのへもらひ、まちわびたる滊車にのりぬ。日も高くなるまゝに、夢の心地もうせて、さむるやと思ふたのみもなくなりにたれど、人のいまはには必ず血脈に知らすると云ふに、不思議なる事もなし。もしは、未だ、全く、みまからでおはすにはあらずや。よみがへり玉ひしにはあらずや。神に祈りても見ばやと一すぢに伊勢の大御神をとなへて心にいのりけるもおぞなりき。何と云ふ山を越えしや、何と云ふ川を渡りけるや、多くの山川は越えたれど、深きめぐみの萬分一を

謝しもせず、誠に分るゝにはあらずやと思へば、たゞかなしく、海山を見る空もなくかきくらすほどに、はや晝時とて、伴れなる人の辨當をとりてくれぬ。されど、食する心もなし。茶をとすゝめらるれど、それも飲む氣なし。日もくれたり。京大坂も過ぎぬと聞く。岡山より米子に出づるが、つねの道なれど、雪深くして、中〳〵にすゝめず。さるよりは、廣島に行きて、それより陸路を行かるゝがよしとすゝむる人ありたり。伴れなるは、妾がつかれたりと見てや。神戸にて下車せんと云ふを、妾は、一刻も早く行かまほしう、旅宿などにとまる心は更になし。滊車發せずば、夜もすがらあるきて、滊車の發する所まで行かましなど思ふに、幸ひ十二時に廣島へ出る滊車ありと聞き、かなしき中にもうれしう、直ちにのりうつりぬ。夜は深くなるまゝに、心もおぼろ、思ひも遠くなり、はては、又、夢の中に夢を見るにはあらずや。さらずば、われがやみ路を迷ふにはあらずや。人にたゞさんと思へど、もし夢ならば、夢の中の人なり。やみ路ならば、同じ世の人なり。たゞすも甲斐なかるべしなど思ひたどるほどに、いつしか、夜もあけぬ。涙に眼をこすりし故か、いたみてえ開かざりしかば、藥をつけ、それより、人の見るもいとはず、涙ははふりおつるにまかせて、またぬぐはず、十時過ぎに廣島につき、此處より車をやとひて、出雲に行かん。思ひしよりは早きなど云ひつゝ、車を命じしに、十八里が程は通へど、それより先き、三十里ばかりはとても雪深くしてふみわけられじ、さるよりは、門司に亘り、滊船にのりて、行かるゝ方まさるべしと云ふ。さりとて郵便も通ひつらんにあるけぬ事はあるまじと云へど、さりては、中〳〵に日かずかゝりぬと云へ

ば、旅なれぬ身、人のすゝむる方しかりと思ひて、やがて、そのすゝめにまかせ、門司行きの汽車汽船にのり、あくる朝　廣島の宿屋にて案内せし門司の旅宿屋につき、便船をとへば、今日は來らず、明日か、明後日の朝なるべしと云ふ。あなまちどほし。かくて、此處に安座してまたん心もなし、何處よりか歩みゆく道はあらずやと問けば、廣島にかへるより外に道もあらずと云ふ。あなやわびし。船は郵船會社よりも、商船會社よりも、又他の社より出る船もあるに、さやうにまれなる事はあるまじ。よくしらべてよと、旅宿の主人にかこちうらむもせんなし。なほ他に道はあらずやと地圖をもひろげ見、下女をも、下男をも、主人をも幾度か呼びて問ひ、今市のものにて近邊の旅宿に男するがありと聞きて、之をも呼びてとひしかど、他に道はあらじと云ふのみ。あはれ、我がうれひ、人はしらじなど無理なる涙は、わきにわきたちぬ。

爐邊獨語（三）

白松園主人

○奇穴譚

徃昔仁田忠常は、嘗つて、賴家の命を受けて、富士の人穴に尋ね入り、遂に不測の禍を受けぬる由、ふるき草紙に云ひ傳へたり。今それに似よりたる話のあるを、人なき爐邊に獨りごちてん。

抑も、績苧なす長門の國は、なべて地勢險峻なるが、中にも美禰郡は、足曳の山より山に連きたる、地質は大概石灰石より成れるなれど、今は至る處、石灰を製する者いと多かり。さて秋吉村と云ふ處に、古くより奇穴ありて、俗に之れを瀧穴

と名く、人若し之れに入らんとする時は、里人に案内を頼み、炬火を點して入るなり。入口は一丈四五尺許りにて、さまで大きからねど、從つて入れば、從つて廣く、凡そ一丁許りにして淵あり。深さ實に計るべからず。龍ありて、此の淵に住めりと云ひ傳へたり。恐ろしく、其の側を過ぎて、一二丁を過ぐれば坂あり。之を猿辷と名づく。爰に至り穴内廣濶にして、其の幾何なるを知らず。巨大なる蝙蝠飛び歩きて、時々人の面を遮ぎり、何壺、呉淵など名づくる池多く、總べて、其の邊りには、鐘乳石夥しく垂れかゝりて、今にも落ち來らんが如く、松炬の火光に映じて、赤めきたり。此の猿辷の坂は、いと嶮しくして、降るべくもあらず、闇々として、其の先を辨ずるに由なければ、恐れて、是よりは、行く者稀なり。只試みに石を投ずれど、戛然として水音せり。傳へ云ふ。

秋吉村自住寺(現存せり)には、代々德高き聖僧出で、降雨少なき年には、雨を乞ふに必ず驗あり。然れど里人德とし崇めて、敬はずと云ふことなし、其の法修如何にとなれば、先づ寺内にて雨乞をなし、さてもなほ降らざるときは、例の瀧穴に入りて、龍が淵に臨み、曹洞宗の宗規に用ゐる、血脈と稱ふる者を、其の中に投ず。血脈若し沈む時は、龍之を飲んで、忽地雨を降らす。又遂に沈まざるときは、更に祈請默禱して、血脈を投じ、例ひ幾日を經とも、沈まざれば止まずとなん。天保の頃、住僧某、ひとゝせ此の行を修する事ありしに、應驗空しからず、沛然たる雨降り來りて、恰も盆を覆すが如かりしに、住僧なほ知らずして、穴の中に在りける程に、水俄かに侵し來りて、さながら穴に充滿たれば、遂に溺れ死にしとなん。老いたる者の言草に、事々しくも語りける。

(其二)同じき美禰郡に、赤郷と名づくる里あり。此處にも、一ッの奇穴ありて、景清穴と名づけたり。但見る高さ四間に餘り、横幅殆々七八間許りなり。例の炬火を振り照らして、進むこと十間餘りは、廣さ入口に異ならず、鐘乳石の垂れたる樣、種々の形あり。猶入ること暫くにして、左手に當りて、少し小高き處に、横樣に入れる穴あり。腰を屈めて入るを得べし。往昔壽永の年、壇の浦の戰に、平家の侍、惡七兵衛景清が、惜からぬ命存命て、古主の仇を復へさん爲め、赤郷村に逃れ來つ、しばし此の穴に隱ろひたりとか。此の横穴は、その住みたる處なりと云ひ傳へたり。いと信け難き事ながら、釜とか鍋とか名づけし石ども丶あり、於福村なる馬地と云へる處に、城趾ありて、佐々木高綱の城なりと傳へたるも、附會とは覺ゆるものから、之等を考へ合すれば、聊より處なからじやはと、老いたる人は今もいふめり。此の穴も瀧穴と同じく、先きを極めし者なければ、いづこまで連きたりとも分かねど、中には阿武郡木間に連きたりなどいふ者あり。されどいかゞあらむ瀧穴のごとく水はあらざれば、好事の人は入りても知らるれど、近頃は乞食盜人の栖家となりて、如何なる禍せんも圖られじとて、入る者稀になりしとぞ。

又、於福村に台山といふ山あり。いと廣やかなる高原にて、うち渡す目も遙に、秋吉台に連絡す。上に一つの穴ありて、直徑一間に滿たざれども、深さ幾何ありとも計るべからず。試に抱大の石を轉ばせば、只から〳〵と音して、響き暫くすれども止まず、漸く遠くして漸く微に、遂に聞えざるに至る。むかし近きあたりの者、馬を放ちて牧とせしに、子馬過ちて、此の穴に陷りしかば、母な

る馬、悲しさにや堪へざりけむ、續いて躍り入れりとぞ、云ひ傳へたる。かゝる不思議の穴なるに、麓に方りて　、亦怪しき穴二つあり。孰れも左迄大きからねど、常に流るゝ小川の水を受けて、悉く吸ひ込めり。耳を傾けて之を聞くに、其の中轟轟として瀧津瀬の如し、五月雨、いたく降り續きて、田の面路の邊　殘る隈なく、濁水さながら路に滿て、如何に溢るゝことありとも、此の穴總べて事ともせず、入れどもゝゝ、其の樣大海に水を注ぐに異ならず、怪しき此の水、何處に出でゝ、何處に流れ入るにやあらむ。或は云ふ、別府村白水と云ふ處の池に出づるなりと、その果して然りや否やを知らず。穴賢々

大和めぐり（承前）

井上頼文

一日　午後　　本科二年生　福舍基千代

大村といへる所の茶屋にて、しばし憩ひ、乾きたる喉濕して出で立つ。汽車を下りしより、既に六里餘も歩みたれば、足は、やうゝゝ重うなりぬ。又、さばかり廣やかなりし四方の眺めも、いつしか狹うなりまさりて、谷のはさまに入る。町々など、見るべき處なく、景色のめづべきものもなし。只山の木蔭に紅葉の淡く濃く染めなしたると、谷川の流の岩にせかれて、おのづからの音樂を奏づるとあるのみ。れいのことゝて、いたく罵りさわぐ。日清の戰爭談も、いつしかとぎれけむ。今はきこえず。折しも、此のつれゞゝを慰むることこそ起りたれ。いづこなりけむ。とある道の邊にある學校の前に通りかゝりぬ。遊歩の時間なりしか

ば、墨くろ〴〵と塗りたる幼兒、あまた出で丶騒ぎ居たり。我々の一行を見て、如何に思ひたりけむ。口を揃へてチャン〳〵と呼ぶ。抑、彼等の、かく罵るは、何か意味ありげなり。ふと心づきて、我々の扮裝を顧みれば、各鳥打帽を戴り、袴の股立高く褰げたるさまあやしければなるべし。さるにても、彼等が心のをゝしさよ。まだ東西も辨へざる幼童にして、しかく敵愾の心あるは敎育の力によるとはいへ、亦天然に尙武の氣風を供へたるなり。（評 チャン〳〵と罵られて、敵愾心ありと褒め立つるは、所謂德をもて、怨に報ゆるものか）今の世、聖皇上におはしまして、文華日に月に進み、かゝる片山里に至る迄、咿唔の聲の聞ゆるは、實に聖代の餘德なり。彼等がチャン〳〵と誹りしも、なか〳〵に興ありなどつぶやきて、しらずしらず、倭村大字垣内に至りぬ。時に午後一時四十分頃なりき。路傍の一茶店にて休憩し、阿保迄の里程を問ふ。老嫗得意げに鼻動めかして答ふるやう、是より世に名高き阿保山越なり。上下三里あまりにして道、いと險し。又阿保へは、この山を越え給ひてより、尙一里あり。今夜はこゝにて一泊し、明日あさまだき、とく越え給へといふ。我等之を聞きて、打笑ひ、何とて、この日の高きに宿泊せらるべき。見よや征淸の兵士は道もなき荒山中を行き、橋梁もなき川をわたるにあらずや。我等が日頃の健脚を試むるは、此の時なり。（評 雞を割くに、牛刀を用うる感あり）とく急ぎて後れたる人に先だゝるなと、互に勇氣を勵して巓目がけて登り初めたり。此の一列に連りし人々は、中村、高松、大塚の三氏を始とし、松本、宇仁、安藤の諸氏、さては、我を併せて七人なりけり。半里ばかりを行きて、いよ〳〵坂路とはなりぬ。足に任せて登り始めしに、道はつゞらの如くくねり廻りて、いつ果つべ

きとも見えず。玉なす汗は衣袗に徹り、肩に掛けたるカバンは、頓に重さを加へたる心地す。吾等は捷徑を取りたれば、あるは道もなき崖頭を攀ぢ、あるは樵夫の徑路を傳ひ、辛うじて絶頂ともいふべき所に登りぬ。しばし憩ひて西北の方を遙に望めば、北勢の諸山、濃尾の連峯、恰狂瀾怒濤の起伏するが如く、雲煙の間に隱見し、淸波鏡の如き、伊勢内海には、白帆風を孕みて往來するさま、誠に一幅の活畫圖なり。詩想起りて腦裡を刺擊せしかども、詩材滿眼却無詩といへるが如く、一詠をも得ざりき。かくて、かなたを見渡すに、森の中より炊烟風のまに〳〵たなびきぬ。音にきゝし伊勢茶屋ならむ。否とよ。伊賀茶屋なめりといひ爭ふ。其は兎に角に、かしこにて腹ふくらかして、此の山を越えむと十數町の處を、只一息にかけつけたり。破れかゝりたる藁葺の板廂、

まづ目につきたるは、おまん小餅とかきたる看板なり。いきせきあへず。とく餅出せといふ。主婦、いと氣の毒げなるおもゝちにて、今日は賣り切らしたりと答ふ。其の失望落膽、こゝに事々しく書くまでもなし。（評、これにても事々しきにあらずさいふか）僅に一錢のむしいもに腹ふくらかし、そこ〳〵に立ち出づ。突兀たる山、迂廻せる坂、幾度か越え、又幾度か下りけむ。最早降り坂にもなりぬらむと思ふ頃、一人の老翁に逢ふ。道を問へば、尙降り坂には一山ありといふ。それを越ゆれば、伊勢地村なりと聞き、高松氏いふやう、これより駈足にて、その山をば、ひた越えに、越えむ。我に從ふものは、とくこよといひも終へずて駈け出でたり。彼も人なり。我も人なり。なでう後れを取らむとて、之につぎしは、中村氏なり。余もまけじ魂もて、二人のあとを追ひて走る。互にまけじ劣らじと、飛鳥

の如く、脱兎の如く、足に任せて走りし程に、僅に三十分時にして、一里計の道を、ひた走りに走り、山麓なる伊勢地村に降りぬ。そも〳〵、この阿保山越といふ峠は、伊賀、伊勢の境に跨れる有名の坂路にして、曩昔は、白晝も盜賊徘徊し、行人を劫したりといふ。然るに、今は道路開通して、二間幅となり、腕車も、容易く往來するに至れり。伊勢地町を通行する時、ある家の前に、阿保山峠、開鑿紀念碑、建設事務所と太筆に書きたる標札かゝれり。宜なり。この擧はと、ひとりごちつゝ打過ぐ。こゝより本日の宿泊地なる阿保迄は一里ばかりと聞きたりしかば、さ程急がずとも着せらるべしとて少し足をゆるべぬ。さなきだにつかれたる足、かけくらべの爲、いよ〳〵痛みまさりて、今は一歩も進むこと能はず。二人の者に勵されつゝ歩む。行けども〳〵阿保は見えず。あまりもどかしきに逢ふ人毎に里程を問へば、始は半里ばかりといひ、次にとへど一里餘りと答ふ。何しに後戻りするものかと詈れば、高松氏笑ひて、さなり。君がありさまにては、三足進みても、二足は、慥にあとへ戻れりとあざける。（評、好諧謔）いと腹立しけれど、誠なればいひとく可くもあらず。かくて、やう〳〵午後四時四十分、兼ねて定めたる、阿保町、田原屋清右衛門方に着す。うるはしき衣まとひ、白きものぬりたる、若き女、四人五人たちそひてそよめく。いとうるさけれど、定りたる宿なればとて、草鞋ときて上りぬ。漸くにして、後れたる人たち、及師の君も、うちそろひて、つき給へり。それより順次洗湯に浴し晩食ををふ。本日の行程、十七里、内滊車の便をかりしは、僅に五里あまりなり。常には寄宿舎の外出でたることなき、我々書生にとりては、隨分つとめたりと

いふべし。おのれは、いたくつかれて、足さへたゆければ、そこ〳〵に日記をかきしるしてふしぬに入る。いつ頃眠りにつきしか。熟睡せり。かくて夜半うち過ぐるころほひ、ふと目をさませば、枕もとなる座敷にて、のゝしりさわぐ音聞ゆ。耳をそばだつれぬ、三絃の音、歌舞の聲、こも〳〵起りて、いもねられず。夢を破られて、しきりに打かこてども、如何にともすべきやうなし。この騒ぎは、夜わけ頃に至りてやみぬ。旅行中、尤心を用うべきは、旅宿の善惡にあり。ことのついでに、いさゝか記しつくるになむ。

頼文いはく、阿保山は、おのれ、幼き頃、越しことわれば、新道と舊道とのけぢめこそかはれ。はじめてわくる心ちせず、そゞろにそのかみのこと思ひいでられて、いとゆかし。ふもとなる花山橋のたもとにて、阿知和子と、一息つきもあへず、いでや、これより、捷徑をとりて、先鋒隊のまなこおどろかしくれんと、いふ〳〵、新道ともいはず、舊道ともいはず、ひたのぼりに登りゆけば、おもひきや、暴雨のためにくづされたる斷岸にいでぬ。おどろきながらも、阿知和子は、する〳〵と、絶壁をくだり、岩角にもろ足ふんばり立あがられし、そのさまは、さながら仁王に似たりけり。おのれもまけじと、身を躍らし、仁王が肩にかた手をかけ、ひらりと飛んだるはや業は、かの宇治橋にたゝかひし荒法師にもをとらじと、たゞ兩人のみ、うち興じぬ。先鋒隊は、いかにやと、小手をかざして、見さくれば、峨々たる峻路をものともせず、走りゆくこそいたましけれ。われも人なり、いでいでと、岩角おどろのさらひなく、足にまかせてはせのぼり、伊勢茶屋にてぞ追しきける。こゝ

より、ゆくこと數町にして、石標たてり。これ伊勢國、一志郡と、伊賀國、伊賀郡との境なり。ひたくだりに、くだりて、伊賀茶屋にいこひ、一杯の苦茶、一盃のさゝ栗に鋭氣をやしなひ、また〳〵走りに走る。伊賀郡、上津村、大字伊勢路、同下川原、阿保村、大字岡田、同別府など、うちすぎ、山中橋をわたり、阿保の俵屋につく。此の日の行程、およそ十四里强、おのれ幼きより、阿保の山中に、一夜旅寐せしことゝも、おもひいでられて

やどりけんとまりやいつこしら雲の
たちかくしたる阿保の山中

歸省日誌

吉野高松

故郷陸奥國をたち出でゝより、はやく四年の年月を經ぬ。父母の君も如何におはすらんとおもひやる心、常にたえねば、今年こそはとて、三月八日朝四時頃東京築地なる正志舍を出で立つ。今日、空はくもりたれども、故郷へと思へばおのづと心勇むもをかし。

やがて上野の停車場につきぬれば、汽車は、今發車せんとすめり。役員の一人が、時せまりぬ。次の發車の時を待ち給へといへど、後るゝも、口をしければ、しひて乘る。さてゆるき出でゝしばし行く程に、東の空、漸々あけはなれて、飛がごとくに見ゆる遠山も、のどかに、打ち霞み、うら〳〵と晴れわたるまゝに、朝日のかげ、小筑波の峯にはがらかにさし昇りぬ。日頃の雜沓に引きかへて、見きくもののどかならぬはなくて、心行くまゝに、晝げの時をも打ち忘れぬ。午後三時ともおぼしき頃、高らかに白川〳〵と呼ぶ聲におどろきて見出

せば、はやく白川の市につきたるなり。其のかみ能因法師が「都をばかすみと丶もに出でしかど」とよみけん、哥などそゞろに思ひ出でられて、處こそはかはれ、今は、

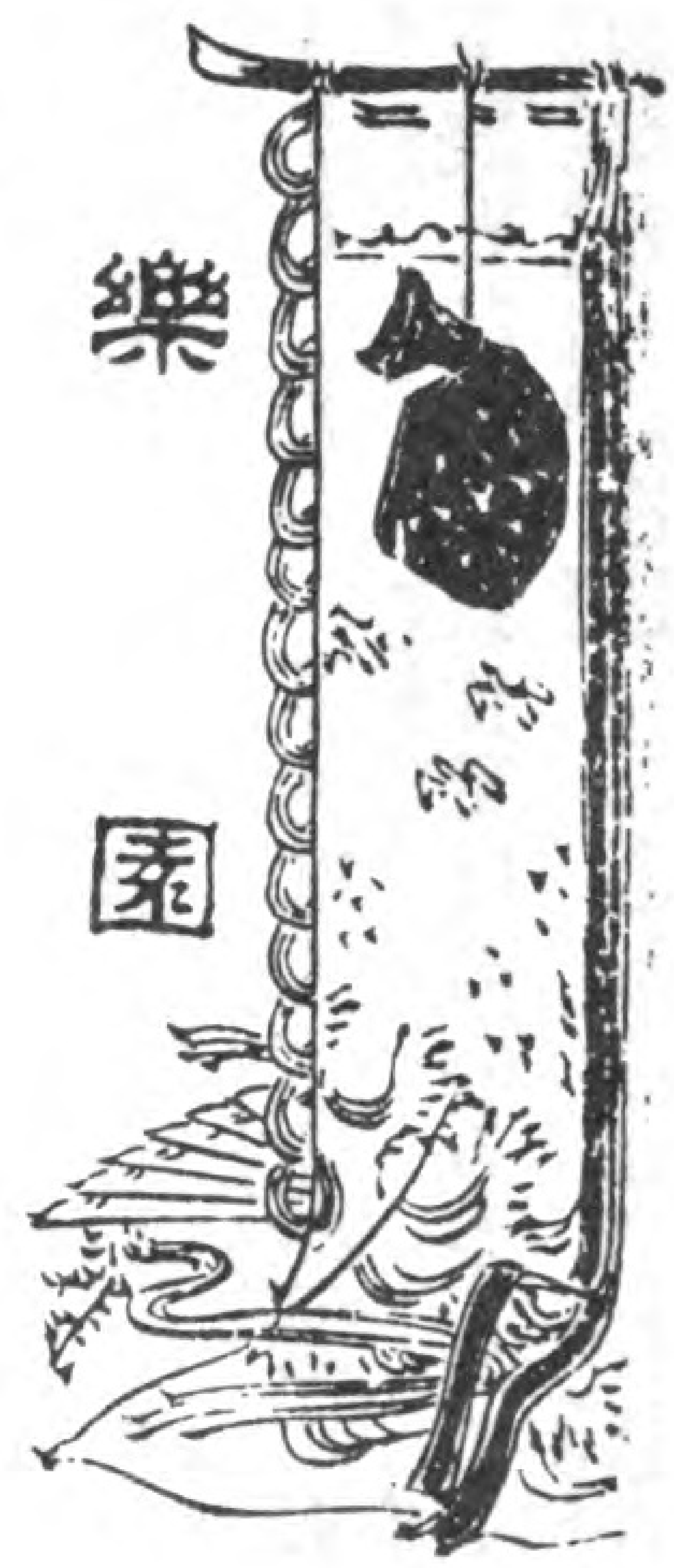
都をも今朝たちいて丶あまざかる
　日はまだたかし白川の關

とも云ひてましやなど、獨ごつもをこなりけり。實に白川の名にたくひて、つもれる雪もましろなるに、盤梯山の高根おろしも肌をとほすばかりなり。まして、城趾には、たゞ一本松、さては半崩れたる石垣など見ぬれば、うた丶さびしき心地ぞすなる。

わづかに半月がほどに、かばかり、さま變れる景色を見ること、能因法師が昔に思ひくらぶれど、豈たゞに、月鼈の差のみならんや。こも一重に　大君の御惠のあまねきにこそと思へば、今更ながら、いとたふとくかしこかりけり。

とかく思ひわたす間に、飛ぶが如くなる車は、數多の驛をすぎ、今は宮城野原を過ぐ。このわたり山川はむかし見わりしさまなれど、いとなづかし。やがて一の關にて車を下りて、ほど遠からぬ姉の君のもとを訪へば、ゆかしき聲して、をさなき姪出で丶むかへたり。やをら内にいれど、一同、且おどろき、且よろこべる樣にて、今日來んと知らば、迎にも出でましをとて、姉の君も、口をしがり給ふ。さてすぎつる四年がほどの事ども、互にとひつ、とはれつして、時のうつるをもおばえざりき。





花のころ

春、やう〳〵ふかくなれば、風和らかに、日あたたかに、百草芳をあらそひ、群花艶をきそふ折なれば、いづれの地か春ならむや。かゝる景色になれては、人の心もうきたちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれありき、終日、花をながめくらすこそ、目をほしいまゝにし、心をこゝろよくするわざなれ。世の中の、いみじう、うれしきことの、あるが中なる其の一なるべし。わが心の樂を知らざる人は、無頼の少年の閑をぬすみて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏にむなしきも、この折なり。杜が詩に鶯の歌あたゝかにして正にしげしと云ひ、陳希夷が、野花啼鳥一般の春と詠ぜしも、皆、この時なり。花のゆふばえをすこしゑひにのりて見るも、ことに、色まされる心地ぞすなる。花に坐し、月にゑひて、二つながらかねたる樂、春宵一刻價千金、花は清香あり月は陰ありといふ詩を思ひいでられぬ。また、花を惜みて春起くること早く、月を愛して夜眠ること遲しといへり。古人は、かくこそ月花をめでしに、今の人の、あたら夜の月と花とにそむきて、むなしくふすは、いとをしむべし。また、夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝おくること遲きは、花を惜まざるなり。

ゆかしきこのさま

魯生

われより下賤の人をば、何かにつけて言ひ朽し、
輕しめあつかひて、得意がる人、世に尠からぬこ
となるが、まことに見にくゝ、聞きにくきことなり。
畏き御わたりにてだに、神々に對ひさせ給ひては、
人民を大御寶とぞ宣はせ給ひつる。然るを、其が
中にて、彼は賤し是は貴しなど、はしいまゝに階
級をつくり、互にせめぎあふが如きは、寧ろ、は
なはだ恐多きことになむ。もし、まことに、其の
心根いやしくて、齒するを耻づるが如きものあら
ば、まことを以て敎へ導き、耻づかしからぬやう
にせよかし。たゞ、さもなく、官位若かぬのみを
もて下賤となし、衣食足はぬのみをもて下賤とな
し、嘲弄排斥する等のことあらば、不忠不臣の汚
名を免る能はざるべ
し。
舊幕のころ、越後新發
田の藩主在國の折、鷹
野に出でられけるが、
いかゞしけむ、さしも
麗しかりし天氣の、に
はかにかはりて、雨さ
へ風さへ吹き出でけれ
ど、殿をはじめて從へ
る人々、あはてまどひ
て歸城せ
り。當日從
ひ行きたり
し一の家老
溝口何某、



早速主人の前に出で機嫌を伺ひしに、殿もいと滿足の体にて

『にはかの雨にて、大儀であッたぞ』

と勞られけれど、家老はひれふし、

『御高恩によつて、われ〳〵は馬にて御供仕りたれど何事も候はざりしが、足輕どもはさぞ』

と云ひかけゝれば、殿は不興の顏色にて其の語を遮り、

『アヽコリヤ、其方足輕を何時抱へしぞ』

家老はハット思ひ

『御足輕衆は』

といひ直しけれど、既、殿の機嫌を損じ、しばしの間、閉門謹愼を命ぜれきとぞ。

前田利家、ある時、福島正則より鯉をおくられければ、家來に命じて、謝禮の狀を書かしめぬ。福島は勇者としてこそ聞えたれ。官位權勢は、はるかに、前田の下なりければ、其の書狀の中に、

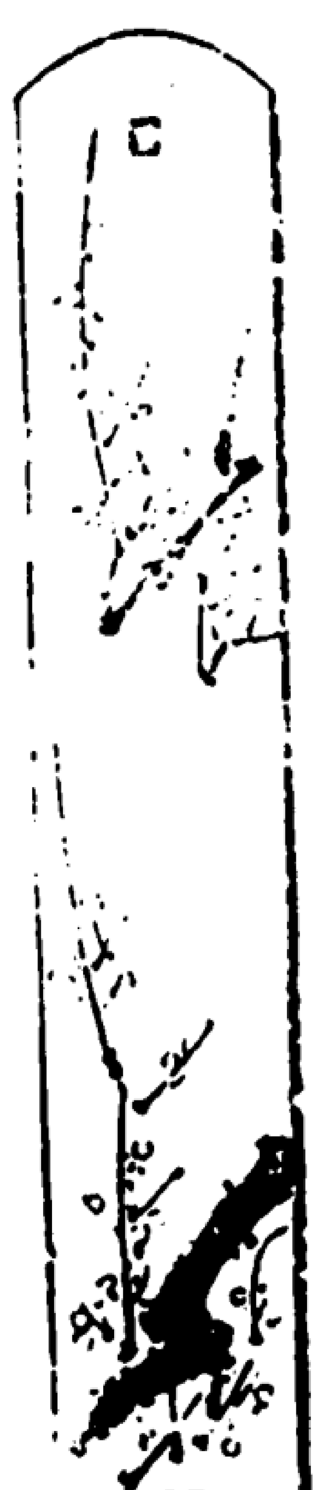
『鯉魚到來、滿足に存じ候』

とやうに失禮なる言葉つき交れりき。利家之を見ていふやうは、およそ、禮狀などいふものは、つとめて先方を敬ふべきものなり。即ち、

『御意にかけられ恭く奉存候』

などやうにこそ書くべきものなれ。すべて、此方より位卑き人などへは、なほ更、懇切に認めつかはすべきものなるを、我より段階をつけて、人を見下ぐること、以つての外の心得違なり。以後は、かならず、斯様のことあるべからずとて、ふかく誡めたりきとなむ。

かれといひ、これといひ、ゆかしき殿樣ならずや。



栗鼠の三郎（第三回）

聽雪女史

兄栗「三ちやん〳〵、ちよいとお待よ、お前のね、巣をば、僕に知らせてくれ給へ……」
と、後から、わい〳〵呼びとめましたが、三郎は、後も振向きもせないで、せつせと、行つてしまいました、で、兄栗鼠は、仕方なく、お父さんや、お母さんと、皆大集會して、只今、三郎が、くれました、品物を、一々わけたり、臭ひだり、ちよつと、なめて見たり、何かして、よろこんで居ました。ところが、此の樣な、立派な食物は、親達はじめ、見たこともないものですから、第一番に、母栗鼠の顏が、柔かになつてまゐりました。
母栗「そら御覽なさい、お父さん。汝達は、彼の三郎は、怠惰者よ、不孝者よと、さんざ惡口を、おつきなさいました時に、私は、いつも、われは末子で、御坐いますから、英勇ですよと、申ました時に、皆さんが、私を嘲笑つたでせう。ほら御覽なさいよ。三郎は利發者ですよ。孝行者でしたね。お父さん……」と、大威張して、よろこんで居ました。ところで、其から、後とは三日目〳〵には、三郎が、頭にのせたり、尾にまいたりして、獨りでは、持ちきれない位に、澤山澤山、種々な物を、持つてまゐりました。ところで、最初には、家内の栗鼠達は、疑くつて居ましたが、後には、家内中で、三郎は、强氣だよ、孝行者だつたと、隣巣の栗鼠達までに言ひ傳へましたが、それから、三ヶ月程も、たちました、おく山の櫻までが、ちらほら咲きかけました。ところが、剛性者の三郎は、一向、音信もいたしません。三日目〳〵と、幾何ら、まつて、ゐましても、三

郎の影も、見えません、すると、

母栗「お父さん、三郎は、どうかしたのでしやうか。近頃は少しも參りませんが、若しや、獵夫にでも」と、涙ながらに、きゝました。

父栗「何に心配するには及ばないよ。彼奴は、例の怠惰者だから、時節がら、いゝ心地になつて、また、寢ばうでも、始めたものよ。さて吾等も、明日からは、ばつはづ、また働きに出るがいゝよ……と、平氣な顏して、居ました、すると、母栗鼠は、



母栗「でも、住居の所を、よく聞けば、よかつたのね」と、獨りで、心配して居ました、

＊　＊　＊　＊

三郎は、土藏の床下の巣に、まゐりましてから後に、毎朝〱、九時すぎる頃に、なりますと、お春が、たづねて參りまして、お菓子だの、パンだの、とはこんでまゐりまして、二人でお仲よく、ころがつたり、はねくつたりして、遊んで居ました。

お春「ごめん下さい。おや三郎さん、まだ寢ばう大

變非常なものですね――。私は、やつと、前に、お孃さんの、おもりをすましてしまつて、貴君が、さぞ待つて入らしやるだらうと、急いで朝のお飯を持參してきたのですよ――。さあお起きなさいよ。」

三郎「おい、お春さん、やかましいじやないか、もうわかるいのッン――……ウン……」

と、起きて、參りまして、漸と、お春の持て來た朝飯を食つて、また寢込で、しまふ時もありまして、

或朝には、いかな、お春も、あきれはて丶、茹卵子の、白みだけ、枕下に置いて知らん顔して、そつと、かへつて、しまひました、

あとで、三郎は、眼が醒めまして、

三郎「今日は、おれの方が、早かつたよ――。お春が、來たらば、大威張りだよ。」と、やつと、正午に起きまして、四方を、きよろ〳〵眺めまはしますと、枕下に、冷やり卵子が、置いてありましたので、三郎は、こら大變だ〳〵、大變、お春樣々に、また、さきがけしられたのだ。そして、お春は、何處に、行てしまつたのだらうね。お春さん、宥して下さい、何處に、かくれてしまつたのだい、起きたよ〳〵、お春さん〳〵と、床の下中さがし、走りました、ところが、お春は、やつと前に、御主人のお室に歸つてしまひました。いくら、呼びましても、まゐりませんから、たづねあきて、三郎は、不平不滿な顔つきで、獨りで、むしやむしや、食つたり、はねくつたりして、運動して居ましたか、其の翌朝からは、三郎は、きつと心を入れかへたものと見まして、朝早く、七時頃より、ちよつきと起き上りまして、待つて居ましたが、お春は、少しもたづねて、きてくれませんから、三郎は、獨りで、お春は、ぞ

うしたのだらう。僕があまり、毎朝、起さしたから、お怒だのだらうか。それとも、誰れかに、目つかつたらうか。それなら　おそくとも、來るだらうが、一向來ない。だうしたのだらうね――ェ、――馬鹿らしい、また寢て待つて、居ろわいと、いひながら、ねてしまひました、ところで其の日はすぎて、其の翌日も、また、其の翌日も、お春の顏は見えませんやうになりましたので。さすがの、怠惰博士の三郎も食物のなくなつたのには、驚いて、それじや、獵犬の居ない留守を考へて、ちよつと、お春の御主人のお孃さまのお室に、行つて、見やう。お春は、病氣かもしれないよと、決心いたしまして、やつと、獵犬のゐない時に、三郎は、すたこら、すたこら、とやつて行きました。まづ第一番に、お春の巢を、のぞき込みましたが中には綿くづばかりでした。それから、机の後から、寢臺の下から、お春さん／＼、怒つて――。おゆるしよ／＼と、言ひながら、さがして居ましたが、この室には、居ないと、あきらめて、また次の室にまゐりました。また、此の室も、隅から隅まで、さがしあるきましたが、あひにく、お孃さんの鏡に、尾が、あたりましたので、がた／＼こん／＼ところがしましたので、大きな、音かして、三郎は、驚き廻りて、隅の方に、少ちやくなつて、かくれて居ました、すると、巢の室で、下女の聲で「おや／＼今のは何んだい。お鍋さん、二三日前からはお春が、貰られたので、私達の用事が、少なくなつて、まアよかつたと思ふたが、でも、何んだか、淋しくつて、音さへすれば、お春／＼と、呼びかけるよと下女仲間に、話して居ました。三郎は、はてなあ、お春は貰られたのだなア――。さて／＼、殘念だつたねい。お春には、

遇ふわけにはいかぬかなア。折角大切の親友を、見失うつたわい。困まつたことだ。いや〱、兎に角、今日は、腹がへつてならないから、何にか、菓子でもと、お嬢さんの、菓子皿のビスケットを、澤山に、食べまして、もとの床下の巣に歸りました。またその翌朝も、きのふの、お嬢さんの室にまゐりまして、何にか、食物を、見つけて、參りましやうとでかけて、參りました。すると、今少しで、お嬢さんのお室と思ふ時に、後からすた〱と、例の獵犬が、やつて、參りまして前足の、大きな足でぐつと、三郎を押へつけました、三郎は、はて、今食い殺されるのかねイと。一生懸命に、手足をふりまはし、尾をびんびんはねまして、犬さん〱、れ宥免下さい私はねィ決して決して惡い者じやありませんよ。私は、お春の親友なのです。どうか、その手足を離して下さいと、涙ながらにたのみました。

獵犬「こら〱、ならない〱、僕といふ番兵をつけて置きなさる御主人の室に、見たこともない、野郎の樣な奴が、はいるわけには行かないぞ。御主人が、宥せと命令なさるまでは、さあ、この足で、踏みつぶしてやるのだ。さあどうじや〱と」、犬力と申まして、振ることには、得手の力を引きだして、二三度、食はへてふりました。三郎はたまりませんから、

三郎「いえ、それじや、必ずまゐりませんから、振るのは、ゆるして下さい。後生ですから、犬君。」

と、聲のあるかぎり、喚びました。

獵犬「いや〱ならない。一たい、野郎の巣は、どこじや、どこから、來たのだ。言ふたならば、振るのだけは、ゆるしてやらう。」

三郎「それじや、只今申ますから、まづ、其の貴君の、おそろしい、口から、僕を離し給へ。

獵犬「ならないよ。さうは甘く行かないが、少しゆるめてやらうわい。

三郎「おまけに皆離して下さいと、申ますから

獵犬「此奴、失敬な奴だ、少さい動物だと思つて、少し砂糖なめさすれば、つきあがりやがるな。許さない〳〵、其のかはりに、巣も聞かない、食つて殺して、しまつてやらう。さあ、これでもか〳〵〳〵」と、かみつきかけました。三郎は、息もきれそふな体で許して下さい。菓子は、竊みませんさ。命だけは、どうか〳〵〳〵と、ありつだけの聲で、きい〳〵〳〵申ました。ところに、下女の、お三と、れ鍋とが、庭前に、出てまゐりまして、

お三「おや〳〵、大變〳〵、お春が犬が、そら〳〵〳〵」

おなべ「じやなくつてよ、栗鼠じやありませんか。早くたすけて、やりましやう。と、二人は、棒を、手に持ちながら、犬を追ひにまゐりまして、漸つと、犬をどけて、くれましたが、其の時には、三郎は、眼をまはして、よく起上りません。お三は、水をやりましたので、やつと、氣がついて、さんざ、喰まれて、痛手を食つて、ほう〳〵の体で、床下の巣に、歸りました。ところが、痛が強くなつてくるほど、心淋しくなりまして、お春の事を思ひ出して、悲んで、居ましたが、食物もなく、親友もなく、なつて、仕方なく、そろ〳〵、兩親や、兄弟が、戀しくなつてきまして、二三日、養生いたしました後で、びつこ引いて、ちんがらは〳〵〳〵と、兩親の巣に、歸りました。すると、近所の若栗鼠は、集まつて、參り

まして、「三郎さん、貴君の耳は、片耳で、足は一本曲りこんで、奇体な身体になりましたね。里に、山の獣が、住み込で、威張て暮しますと、そんな身体になりますかな。あはゝゝゝ」と、嘲弄られまして、三郎は、一生片輪で、暮しましたが、其の後は、極く正直な働き者になりましたとさあ

（をはり）



春雨　東久世通禧

みるからうちに緑のまさる心ちして
　庭のしはふにはるさめのふる

月夜に花を見て　佐々木高行

おほろ夜の月おもしろく隅田かは
　霞むなみまにはなそにほへる

春夢　鍋島直大

諸共にあそふとみしははなかけに
　ねふれるてふの夢にそ有ける

霞める空を雁かへる　前田利嗣

かへる雁こし路のみちやまとふらん
　霞かくれにこゑそきこゆる

古屋春雨　津輕承昭

住すこしふるやの庭にはなひとり
　ぬれてしつけき春のあめかな

長閑なる日濱邊にいつ　長岡護美

芝はまにうち出てみれはあはの山
　あはともみえぬ春かすみかな

海邊霞　諏訪忠元

朝なきにこきいつる舟の影きえて

すさきの沖はかすみわたれり

野徑蝶　竹屋光昭

右左ゆきゝの野へにむつれつゝ
小蝶はそてをはなれさりけり

霞中雲雀　宮地嚴夫

うら／＼と霞こめたるやま畑の
麥生のうへにひはりなくなり

花見ありきて　北郷久政

そことなく浮れ／＼てけふも又
花の木かけにくらしつるかな

里春月　鎌田正夫

おほろ夜の月おもしろみ里ひとの
花見かへりのうたもきこえて

早蕨　蜂須賀隨子

陽炎のもゆるわたりを心あてに
たづねて得たる野への早蕨

春のゆふへ山里をとふ　鍋島榮子

夕まくれやまへの庵をとひくれは
みやこにしらぬ花そにほへる

菫に蝶　前田朗子

飛蝶もはなれさりけりすみれくさ
ゆかりの色をむつましみつゝ

夕春雨　西四辻茂子

さくらかりあすと契りし此ゆふへ
雨のそらのみなかめられつゝ

折花贈人　岩崎寧子

をられても嬉しかる覽ものゝふの
門出におくるはなのひとえた

春雁離々　保科節子

つらなりて來し友いかに成ぬらん
離れはなれにかへるかりかね

漁夫　小川直子

影くらきあし火のもとに浦ひとか
あみつくろふと夜を更すらん

麥　中嶋歌子

子規いまかきなかん山はたの
むきのほのかに春かせそふく

望遠帆　河村重子

和田の原沖へはるかにこくふねの
ほかけのとけき夕なきのそら

月前花　宮地小東洋

ともし火の影にそむきて月かすむ
軒端のはなにむかふ夜半かな

房州日記　第六回

柴田まづえ

四日、東の空、ほの〲と、打しらみたるに、おきいでて、母と共に、姉の小兒ども、彼是うちつれて、いでたち、例の松原を、うちすぎ行けば、道すがら、草むらの露、ふかく衣の裾も、そぼちぬ。磯に打いでたるに、海の上とほく、きりふたがれり。浦々の、景色、おぼろなるは、太古の代もかくやと、思はれたり。海水浴を終へて、小兒等と、共に、磯邊に遊ぶ。ささやかなる黒き貝の砂の中に、かくれたるが、ひく汐に流さる、いとをかしければ、いそぎ、海女にとへば、浪の子といひて、此の土地の人は、朝な〱、拾ひおき、汁のだしに、調じて、食するなりといふ。いとをかし。諸共に、袖くくりあげ、裾も高く、かかげて、そを拾はんと思ひて、砂かきわけてもとむるに、ひく汐に流され、さす汐に、おし上げられなど、するを、小兒らは、うち興じつゝ、聲うちあげて遊ぶ。

磯つたひ貝ひろふ子よこころせよ
　袖の上までよする白浪

この夕ぐれ、千倉の里より、ふりはへて、友のたづねきて、とかく、教育てふことに、つきて、物語りぬ。この友等は、さきに東京に出で丶、修業せしものにして、今は、かの千倉の學校に、奉職せるものなれば、おのれは、彼の地の、風紀をとふに、友は答へて、さなり　昔より。木訥ば、仁に近しと、いへる如く　人情の、あつきは、なか〳〵都にも、たちまさりたり。いで、そのさまを、いはんに、學校の教員としいへば、各、そが、學校を、我家とまで　思ひて、朝たは、疾くいてゞつとめ、夕日かげ、落ちんとする頃まで、彼是、職務にかゝづらひ、家に歸りて後は、また學校に、うけもちなりし生徒らの、家に至りて、そが親はじめ、家族までに、懇篤なる、教示しなどして、分時も、そが重任を、忘るゝ事なし、またそが生徒たるものは、よく師を尊び、學校を敬ひつゝ、おのれに、快樂あれば、忽にして、師に語り、おのれに悲哀あれば、忽にして、之を訴へ來りて、そが敬信する心は、神佛の次に、師たる人をあがめ、漸く祖先にも、兩親にも、及ぼすなり。之を、都の人に、比ぶれば、霜夜の月の光と、春の夜の朧づく夜などにもたくへつべしなど、かたりつゝけて、さま〳〵研究すべき、事ども語り合す。げに、都の人の中に、恥かしきこともあれど　頻繁なる、今日の都會、やむことを、得ざる狀勢なりと、うち嘆じつゝあるに、友は、猶かたりつゞけて言ふ、やう、さなり。鄙とし、いへども、年一年に、風紀の浮薄におもむけることはいちじるしといふ。あはれ邊土にもせよ、鄙地にもせよ。撲實なる風は、いつまでもやしなひて、失はざらむことこそ

のぞましけれ。といひつゞくるに、夜もふかくなりゆけば、下女の床とらせ、人々皆いねたり。おのれは、とかくねぶりがたきまゝに、文机によりて、筆をとるに、松風浪の音いとものすごし。

みち汐のさしてきぬらむ小夜ふけて
磯の松風音のはげしき

都にやるべき文などかきていねたり。（未完）



雜報

●御下賜　今般巴里萬國博覧會開會に付、日本美術協會幹事下條正雄は、農商務省の囑托を受け、又た、同平山成信は、出品聯合協會の依頼を受けて、孰れも、佛國に渡航する筈なるが、日本美術協會にては、此の機を以て、前兩氏に海外各國に於ける美術工藝實況の調査を委囑したるにより、畏き邊りに於かせられては、兼て美術工藝を御奬勵あらせらるゝ事とて、今回右費用補助として、同協會へ金三千圓を下し賜りたりと承る。

●東宮殿下御詠を天覽に供し給ふ　東宮殿下は御研學の餘暇を以て、漢詩を三島侍講に、和歌を本居侍講に學ばせられ、御作も、頗る多きが中に、取り分けて多きは、和歌の方なり。頃日葉山御用邸に行啓中、三十餘首の御作ありしを、先ごろ歸京したる中山東宮侍從に託させ給ひ、天皇陛下の御覽に供せらる。既に昨年の冬より御作ある毎に　陛下の御覽に供へ給ふ事となりたりとぞ。

●萬事御畧式　こたび御擧行あらせらる可き、東宮御婚事御式は、總て、御簡畧を旨とせらるゝ由にて、最初は、市民の祝意を御嘉納あらせられ、

兩殿下御同乘にて、市中の各要所を通御あらせらるべき御摸様なりしも、御略式に據らせらるゝ事とて、是等も總て、御見合と相成りたる由承はる。驕りにのみ走りて、矯しき事ことをしらざる、世の人かくと承はらば、いかに。

●兩内親王殿下　大磯大隈伯邸に御滯在中の、常宮周宮兩内親王殿下には、いにし廿六日午後三時御出門同地尋常高等小學校卒業式へ臨ませられ、裁縫科女生徒の手に成りたる手細工及び、裁縫物等御覧ぜられ、御機嫌麗はしく、午後四時御歸邸遊ばされたり。當日生徒一同へ、若干金を下賜せさせられしに付、淺倉校長は、同邸へ伺候御禮申上げたり。又、藤澤在寒川神社及び、平塚なる八幡神社神官より御成を願ひ出でたるにより本月一日藤澤在寄川村なる寒川神社へ御成り、午後御歸邸あらせられたり。

●御慶事奉祝彙聞

▲大臣及大臣待遇の奉祝　東宮殿下御慶事に付き各大臣は、銀製の馬を獻納する由は、既記の如くなるが、右獻納に付いては、大臣待遇たる大隈、板垣兩伯にも交渉し、連名を以て獻納する都合なりと。

▲貴族院議員の奉祝　貴族院議員も、今回の東宮殿下御慶事奉祝として、物品を獻納する筈にて、勅選議員は五圓、多額納税議員は拾圓宛醵出し、其の獻納品の選擇及調製等は、總べて、同院事務局に一任することゝし、目下既に着手したりと。

▲女性御用掛任命　御慶事に就いては、是非とも女官の必要あるより去月末つかた萬里小路幸子、正親町鍾子、吉見光子、生源寺政子、富田箕子の五人に、東宮御慶事御用掛を御仰付けられたり。

▲内務官吏の獻品　今回の御慶事には祝意を表す

る爲め、內務省、檢査院、警視廳、各府縣地方廳に在勤の吏員等は、高等官月俸百分の二、判任官百分の一半宛を醵集し、金銀製の香爐を献納することに決せりと。

▲衆議院議員の奉祝　衆議院にても、各政黨の代表者として片岡健吉、元田肇、犬養毅　尾崎行雄、臼井哲夫、長谷場純孝の諸氏、議長室に集會協議の上、東宮殿下御慶事奉祝の爲、議員より物品を献納する事に決定し、各議員は五圓宛を醵出するとし、献納物の選擇等は、總べてまた、同院事務局に一任する筈。

▲御慶事會議の結果　去月二十八日、宮內省にて開かれたる東宮御慶事會議にては、種々重要の件々を協議せられたる由にて、其の詳細は知るを得ざるも、漏れ聞く所に依れば、御儀式は、總て、御省畧を旨とし、一般に侍醫の上申に依り、御健康上を標準として、萬事の御取極めを爲すの方針を取らるといふ。

●宮城拜觀　女子高等師範學校卒業生は、先月末高等女學校生、幷に、高等師範學校卒業生は、其の翌日宮城を拜觀したり。

●死に事ふる如生につかふるがごとし　大分縣宇佐郡八幡村城九郎右衛門に二男二女あり。兄を傳次、次を仙吉、又一人の妹をお菊と呼ぶ。兄は、仔細ありて、岡山へ趣き、妹お菊、共々一家を爲しけるより、弟仙吉は、同縣日高郡日足村永松柴樹の娘お智惠を貰ひ受けて、家を襲ぎたりけり。左る程に九郎右衛門の女房某は、廿餘年前より神經病に罹りて、擧動狂躁看護の勞普通ならず、剩さへ昨年の秋より、慢性胃加答兒併發して、一層看病の勞を増せしも、お智惠は、更に苦にもせず、汚れたる病衣の洗濯より、煎藥に至るまで、皆手

一つに辨じける。折柄他鄕に在りしお菊は、母の病革まりしとの報知を得て、急ぎ歸り來り、お智惠共々看護に手を盡しゝかど、養生叶はずして死したるより。兩女は、厚く葬儀を營みしが、後は雨の日も、風の夜も厭はゞこそ、朝に夕に、七日が間一日も怠りなく兩女が墓參して、宛ら生きたる親に事るが如くなれば、同村の人々相傳へて、其の孝道に感激し、今は一鄕の美談として賞へらるゝとなん。

●故土方伯爵夫人　いにし十六日逝去せられし土方伯爵夫人は、名を龜子と呼び、土佐の藩士田村永政氏の長女なり、文久元年廿三歳にて、土方家に嫁し、長男猛猪氏を擧げしも、程なく早世す、次に二男久明氏を生む、後ち陸軍大尉となり、一昨年卒去せらる。夫人は性質高潔にて、慈愛の心極めて深けれど、氣象雄々しく、土方伯、文久三年八月京師の變動以來、七卿に從うて、九州に下り、爾來六年間王事に奔走して、家を顧みず。其の間夫人は、舅姑に仕へて、孝養怠りなく、傍ら久明氏を養育して、天晴賢夫人の評宜しかりしとて、伯爵顯榮の地に登りしよりは、専ら慈善の事に一身を委ね、婦人衛生會を起して、會頭と爲り、赤十字社病院の婦人部幹事と爲り、慈善病院の事を賛け、婦人奬勵會に力を盡し、東京感化院のために、婦人部を起して、其の局に當り、育兒院の事をはじめ、都下の慈善事業一として、其の事に關らざるはなし。近頃瓜生岩子のために、瓜生會を起して、會長と爲り、大方ならず力を致されしが、其の事未だ成らずして遠逝せられたるは、惜むべきなり。年六十三とぞ聞こえし。

●ねかはしきこゝろばせ　今は十年の昔明治廿二年秋の頃より、大阪南區浮世小路笹村季智氏の

別莊へ、夜々虫を賣りに來る、一人の少女あり。年の頃は十歲を出ず扮裝甚く見苦しきも、人品何となく賤しからざるより、仔細ある者の果ならんと、試みに、其履歷を尋ねしに、少女は面耻ゆげに、頸を垂れ、微けき聲して語るを聞けば、少女は、名を、お梶(十)と呼び、父は元和歌山藩士にて、饗庭源三郎と名乘り、一稜の武士なりしも、維新後大阪に出で、慣れぬ商法を營みし爲め、忽ち資財を分散し、搗て加へて、永らくの重病に、一層家計立ち難く、遂にお梶を紡績會社に通はせて、日々幾許かの賃金を貰ひ受け、多少生活の補けは爲せど、尚不足勝なれど、斯く夜な〳〵虫を賣り、歩くものと知られたり。笹村氏は、お梶の物語に漫ろ愍れを催し、尚常々懇意にせる憲兵二等軍曹、今田兵吉と云へるに事情を語りて、探聞せしめたるに、毫もお梶の物語に違ふ處あらねば、同氏は一層感に打たれて、遂にお梶を我家の小間使に爲し、源三郎を府立病院へ入院せしめて、療養の道を與へけり。去る程にお梶は笹村氏の恩に感じ、小供ながらも甲斐々々しく立ち働く內、早や三年の年月を經て、同人が十三歲の頃なりしとか、奈良市水谷川男爵の夫人某が、お梶の身の上を聞きて、金若干を惠與ありしに、お梶は辭して受けず、我々親子が笹村の主人に享けし鴻恩、却々以て生涯の內に報い奉らんこと覺束なきに、尚、此の上にも幾重の御恩を蒙りては、冥加に餘るとて、堅く否みし一言は、少女に似氣なき天晴の申し條なれど、夫人の感激大方ならざりしとぞ。左ればお梶は、日に增し笹村一家の愛顧を受けて、同家に人と成り、年頃に及びて主人の媒に因り、同家の親族に嫁し、今年廿一歲現に難波千三百十七番地に慶たき家庭を作り居れりとぞ。

●少女の遺言　山口縣本郷小學高等科女生三浦イウ(十三)かねて孝心深きものとて、人のほめものなりしが、流行感冒に罹り、死せんとするに臨み、小使錢を貯蓄せしものを持出し、其の全部を擧て、學校同級生徒紙筆墨に寄附せんこと、及び、校長以下教員に、厚く禮を述べられんことを父母に乞ひ、合掌したるまゝみまかれり。いしくも、殊勝のことにてこそ。

●可憐の少女　越後柏崎小學生徒中村ナカ(十三)妹イシ(十)家貧にして、十分に學資を得る能はず。昇校前退出後姉妹相携へて、豆腐を賣り歩き、其の得る所の一半を、父母に捧げ、一半を學資となす。而かも姉妹共に各自級の級長たりとそ。

●欽すべき少年　大和國、宇陀郡、御杖村の籔内勝次郎の二男に梅吉(十五)と云へる少年あり。過日同地方にて催はしたる、赤十字幻燈會を參觀して、感慨の念、轉禁ずる能はず。自から村役場に出頭して、赤十字社大和支部の分區、委員なる釜谷、同村長に面會し、入社の手續を尋ねたる處、梅吉の未だ、うら若きを見て、おもむろに諭し、志は、誠に嘉すべきなれど、年醵金三圓の義務あり、年少の身にては、却々の、大役なれば、篤と、父兄に相談の上にて、決する方良からんと云ひ聞せしに、梅吉は、承知せず。三圓と云へば、容易ならねど、日に割充つれば、八厘三毛、此れ位の事は、父母より貰ひ受くる、小使錢を貯へなば、左して苦む程の事にあらず。此れ迄の貯へも、少々はあり。且つ、今後は必ず、肝に銘じて、月々廿五錢を別途に貯蓄し置き、誓うて、義務を怠らざれば、是非共入社を許されたしと、赤誠、面に現はれて、容易に引取る氣色なきより、扨は、眞實入社を望むなれど、村長も、甚く、同人の氣慨

に感じて、請のまゝに、入社申込書を作り與へ、梅吉に、拇印を押さしめて、誓書を調へたりと云ふ。

●喫煙禁止訓令　樺山文部大臣は北海道廳及び各府縣文部省直轄學校に對して左の訓令を發せり。こは、直接に、諸媛には、要のなき事ならめど、家庭に主たる方々には、心得あるべき事と信じ、此處にかゝげぬ。

學校生徒の喫煙に關しては、小學校に在りては、明治二十七年文部省訓令第六號を以て、生徒の喫煙すること及び、煙器を夾帶することを禁すべき旨訓令し、中學校等に在りても、實際喫煙を禁止するもの多し。蓋し學校生徒の喫煙は、衛生上有害なるのみならず、風紀に關すること少なからず、殊に此の際未成年者喫煙禁止法の發布ありたるに就きては、小學校中學校師範學校及び、等位の之に準ずべき學校に在りては、取締上、其の生徒の成年以下なると以上なると學校の内外とを問はず、喫煙し、及び、煙草煙器を夾帶することを禁止すべし。其の他の學校に在りても、特に注意を加へ、法律違反の者なからしめんことを期すべし。

●高等女學生の試驗及體操　また樺山文相は、同じく本月一日を以て、高等女學生の學科試驗、及び、體操に關し、女子の師範學校、及び、高等女學校に在學する年紀は、心身の發育上最も、注意を要する時期なり。故に右等の學校に在りては、女生徒學業の成蹟は平素に於て、便宜、之を調査せしむることゝし、時期を定めて、一時に全學科目の試驗を行ふこと勿からしむべし。又月經の間は、其の生徒に限り、體操科を課せしめざるを要すとの訓令を發せり。

●小學教育費國庫補助法　先日公布せられたる市町村立小學校教育費國庫補助法の全文、左の如し。

第一條　市町村立小學校教育費を補助する爲、國庫は、毎年豫算を以て定むる所の金額を支出す。

第二條　前條の補助金ば、市町村立小學校教員の年功加俸及市町村立尋常小學校教員の特別加俸に充つ、其の加俸に關する方法は、勅令を以て、之を定む。

第三條　第一條の補助金は、學齡兒童數、及、就學兒童數の和に比例して、北海道廳、及、府縣　配賦す。

北海道廳、及、沖繩縣の配賦金は、文部大臣之を管理し、其の他は府縣に下付すべし。

附　則

第四條　本法は明治三十三年四月一日より施行す

第五條　市町村立小學校教員年功加俸國庫補助法、及、小學校教育費國庫補助法は、之を廢止す。

第六條　本法施行の際市町村立小學校教員年功加俸國庫補助法に依り、現に年功加俸を受くる者には、同一學校に勤續する間其の加俸に相當する金額を支給す、但し本法に依り、年功加俸を受くる者は、此の限に在らず。

前項に依り、支給する金額は、第三條の賦配金より支出す

●女子高等師範學校卒業授與式　いにし三月三十日、同校に於て、第十一回卒業授與式を擧行せられたり。式の次第は、來賓は、樺山文部大臣、奥田同次官、上田柳澤兩局長、伊澤高等師範學校長、菊池大學總長、其の他直轄各學校長生徒の父兄等、七十名ぞかなりき。

一午前九時三十分着席

一唱歌

皇后陛下御歌「みかゝすは」（總員起立）

「おもへははてなき」

一卒業證書授與

次に高嶺校長正面の壇上に立ち、方今、各地に學校俄に增加し、從て、各學校の教員乏しくして、充分に供給する事あたはず。今日此の地に任せられたる教員、席未、暖ならざるに、はやく他に轉せんとする感なきあたはず。されば、生徒の教育

も充分なる事あたはず。甚だ遺憾なりとす。諸子、能く是處に心を用ちゐて、任地にむかひて充分に盡力せられよと、又、附屬高等女學校卒業生にのそむ所は、學校教育と、家庭教育とは、一致せされば、充分なる教育の功を奏する事能はず。之を實地に行ふは、教育ある婦人の任なれば、諸子、先づ、之を務めよとの意味の告辭ありたり。

次に、樺山文部大臣、席を立たれて、祝辭を朗讀せられたり。其の中にて最も注意すべき所は、現今の教育者には德育と云ふ感念とぼし。智育にても体育にても、なんでも德育をはづれては困る。故に儒書にて、智仁勇と、三に云ふ時も、自ら、其のかげに、德が副うて居る云々となりき。

次に生徒と謝辭

次に唱歌「はてしなき」にて、正午式は終はれり。

左に卒業生の名をかゝけむ。

◎女子高等師範學科卒業生

新潟縣平民　荊木みつ
兵庫縣平民　稻見うた
高知縣士族　西森元
栃木縣平民　加藤しづ
廣島縣平民　田坂りつ
北海道廳平民　長岡榮
岡山縣平民　山川龍野
長野縣平民　赤穗ちはる
德島縣平民　木內たつの
德島縣平民　廣島てる

香川縣平民　伊藤ちさじ
滋賀縣士族　石居房
栃木縣平民　大羽ひさ
埼玉縣平民　吉村はま
愛知縣平民　土本まさ
香川縣平民　武藤かめ
新潟縣平民　丸山てる
北海道廳平民　安藝・左代
福岡縣士族　三池千幹
大坂府平民　茂木こう

長野縣平民　伊藤成
新潟縣平民　馬場滿
宮城縣平民　加藤きみゑ
新潟縣士族　高山よしみ
愛知縣平民　塚本ろい
三重縣平民　草川よし
東京府士族　小寺あや
山形縣平民　佐藤いう
高知縣士族　宮地榮

◎女子高等師範學校撰科卒業生

大坂府平民　池側榮
埼玉縣平民　北西うの

◎附屬高等女學校補習科卒業生

東京府平民　市田登代
東京府平民　綱さだ
東京府士族　江守美津
和歌山縣平民　苅谷せい
東京府士族　中島梅
東京府平民　里見たつ
東京府士族　片柳敏
東京府平民　稻岡業
福島縣平民　榊まつ

富山縣平民 澤井美代
東京府平民 三浦いし
靜岡縣平民 水谷喜代

◎附屬高等女學校本科卒業生

東京府平民 板倉貞子
千葉縣士族 岩崎海門
東京府平民 服部徐
東京府士族 原喜代
岐阜縣平民 土岐滿壽
福島縣士族 小此[illegible]まつ
山口縣士族 河上綾野
高知縣士族 吉川琴喜
東京府平民 高木のぶ
東京府華族 土屋保子
茨城縣平民 中山さわ
群馬縣士族 南條竹
石川縣士族 瓜生千代
東京府士族 野村德惠

東京府平民 市村八重
東京府平民 石井志都
東京府士族 原田乙女
東京府士族 西富貴子
青森縣士族 珍田貞
靜岡縣士族 岡本喜美
山口縣士族 賀田淺子
埼玉縣平民 吉田せい
滋賀縣平民 武久つた
熊本縣平民 辻はつ
東京府士族 南部濟
東京府士族 内山よし
東京府平民 井染好美
東京府平民 大門むめ

東京府平民 岩田ふみ
福井縣士族 八田美根
佐賀縣士族 原米
山梨縣士族 富岡夏
長野縣平民 岡田浪江
靜岡縣平民 岡田學
鹿兒島縣士族 神田愛
佐賀縣士族 田原繁
千葉縣平民 曾根操
東京府平民 常川豐
群馬縣士族 南條千世
東京府平民 植村澄江
東京府平民 居初增美
埼玉縣平民 大澤まつ

岡山縣平民 矢野齡
東京府士族 牧田半
茨城縣士族 松木英
長野縣平民 小池梅治
靜岡縣平民 寺尾その
東京府華族 嵯峨淑子
青森縣士族 佐藤千世
千葉縣平民 清川澄
千葉縣平民 庄司愛
埼玉縣平民 註竹
兵庫縣士族 鷲見てるに

石川縣士族 山内純子
東京府士族 松室田鶴
東京府士族 丸山喜美
三重縣平民 小杉きみ
三重縣平民 渥美石江
滋賀縣士族 相馬宜子
岩手縣士族 菊池貞
福井縣士族 宮崎せつ
東京府士族 清水壽
東京府華族 一柳滿喜子
東京府士族 杉山操

東京府士族 松本貞
北海道平民 松田麻惡
靜岡縣平民 近藤さき
長野縣士族 江崎いそ
東京府士族 昌谷三重
東京府平民 櫻井梅
千葉縣平民 木内こよ
岐阜縣士族 宮島操
山形縣士族 志田里起
東京府平民 杉浦菊

●女子電話交換手　東京電話交換局にては、目下女子交換手の募集中なるが、元來電話交換手の事務は、女子の職業として、最も適當にして、給料の如きも、是迄金十二錢以上四十錢以下なりしを、先般規則改正の結果初採用は、十八錢以下

とし、最高五十錢迄給與する事となりなるを、尙今回改正を加へ、増給年限の如きも、二十五錢以下は、制限を置かざる事となりたるにより、從前に比すれば、昇進の道も開けたりといふ。

●實扶垤里亞の流行　昨今氣候の不順なる故にや、府下各區に實扶垤里亞流行の兆あり。六七歳の兒女にして、之れに襲はるゝもの少なからざれば、子を有てる人々は注意すべし。原因は、多く、流行感冒症より來るといへり。



●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題

住所
姓名

……………
……………

文書式

題

住所
姓名

……、……、……。……、……、……。……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。

敎の庭



四月五日兼題　對花思故郷

天

三重縣度會郡宇治中ノ切町　河原芳子

ふるさとのふるき軒端のちこさくら
　いかにさきてやわれをまつらん

地

肥後國下益城郡松橋町　黒田明子

世のうさをさくらの花にむかひても
　なほふるさとのはるをしぞ思ふ

人

三河豊橋　服部正子

常はしもおとづれきかぬふるさとも
　はなゆえにこそとはまほしけれ

（以下原稿到着順）

あすか山咲きしさくらのうるはしみ
　おもひうかぶはふるさとのには　丸木靜江子

この頃はゆめにもはなのみゆるかな
　さしふるさともいまかさくらむ　服部蕪子

みやこべの花にもあかすおもふかな
　わかふるさとのはるのけしきを　加藤數子

さくら花あすはゆきさやふるさとの
　さもにはつげよはるのやまかぜ　伊東千代子

ふるさとのみやびの友につげばやな
　みやこのはなはいまをさかりさ　伊東いさ子

しる人のなきふるさともいまこそは
　さくらさしのべはなのみやこに　三宅中枝子

近からば行きてをみましふるさとに
　わがうゑおきしはなもさくらむ　河合縫子

朝なゆふな花をみながらおもふかな
　なほふるさとのはるやいかにさ　伏脇米子

さくら花みるたひことにおもふかな
　さもにあそひしふるさとのさも　屋舗鈴枝子

色も香もおなしさくらの咲きしより
　たゝなつかしきふるさとのそら　枚衆子

すみた川つゝみのさくらはらはらさ
　さもに見ることそたのしかるらめ　新井さよ子

糸さくら見るよりいさゞふるさとの
　むかしのいほのしのはるゝかな　井上津佐尾子

見る花もはるにかへるさおもへはや
　なほしのはるゝふるさとのいほ　永山碧子

すみすてし里のさくらも咲きぬらん
　うへ野のはなはいまさかりなり　財田富子

ふるさとの春やいかにさおもふかな
　みやこのはなのさきのさかりは　青木たま子

世々すみしわが故さとをおもひ出で　仁保基子

ふりかへりみるやまさくらはな

ふる里のはなはいかにとおもふかな
みやこのはなをみるにつけても
徳永露子

ふるさとの春はいかにとおもふかな
げにみよし野のはなのさかりに
徳永廣子

ふるさとのがもひぞいとど増りける
みやこのはなのさくにまかせて
徳永廣子

草まくらたびねをはなのしたかげに
つくづくしのぶふるさとのはな
徳永識子

うつくしき花の木かげはいとどなほ
わがふるさとぞしのばれにける
小森田輝子

ふるさとの人にみせばやみよし野の
はなのさかりのはるのあけぼの
小森田初子

花見ればこひしとぞ思ふふるさとも
なほはなを見てわれや戀ふらむ
村上操子

ふるさとの野山やいかにうちひさす
みやこは花のさかりなりけり
田村多豆子

たらちねもともにとおもへは故郷の
そらなつかしきはなのかげかな
日高かず子

ふるさとの春やいかにとおもふかな
ゆくてのやまのはなを見るにも
石川久子

思ふことなしといひつるふるさとも
はなみることにしのばるゝかな
石川梁子

野も山もなへてさくらのさきみちぬ
わかふる郷はいかにやあるらむ
石川頼子

ふるさともみやこもおなじ春なれば
いつこもはなのさかりなるらむ
石川南江子

なかなかに花にこゝろもなくさまで
なかめられけりふるさとのそら
名取よし子

ふる里なしのふよすがとなりにけり
ゐまひそめたるにはさくらはな
大谷津峰子

ふるさとの友やいかにとのきちかき
したりさくらにしのぶこのころ
内海順子

花見ればこそのむつひのしのばれて
こゝろにうかふふるさとのそら
森こと子

咲きしよりいとどふる里しのばれて
かへさわすれしはなのしたかげ
佐野りう子

峰も尾もはなは咲きけりふるさとの
なれし木かげは如何かあるらん
八木沼里子

こゝろなきかきれの花にいざなはれ
またふるさとなしのぶころかな
相良正ゑ子

さくらさくころとちきりしふる郷の
はなもさかりとひとのまつらん
河田いし子

たくひなき上野のはなをながめても
なほふるさとのはるぞこひしき
岡田春子

つくづくと花みてくらすこのごろや
こひしくなりぬふるさとの空
山田松雄子

故さとのそらなつかしきゆふぐれの
たびのやどりにはなの香がする
西本つれ子

あすか山花さくころはふるさとの
いもがかきれぞ思ひやらるゝ
山田しむ子

さくら花見るにつけてもしのばれぬ
わかふるさとのはるのあけぼの
山田き代子

花みればおもひあまりてまたさらに
松田君子

八重一重にしきかされてふるさとに　わかふるさとのしのはるゝかな　福原蓋子

山さくらはなさきぬればふるさとの　ひと日も早くかへらんとぞ思ふ　筑紫春子

内日さすみやこのはなをみるたびに　いとゞこひしくなりまさるかな　佐々小琴子

くさまくら旅のそらこそわびしけれ　わがふるさとぞしのばれにける　左々有鄰子

春くればかすみへだつるふるさとに　わがふるさとのはなをおもへば　村崎包子

山さくら目にしふれゝばふるさとの　こゝろひかるゝいとさくらはな　服部倫子

名にたかき花みるたびにゐまさばと　はなのあそびを思ひいでにけり　友永章子

さきさきく花をながめてふるさとの　わがふるさとのひとをしぞ思ふ　那須昌子

山さくらなりてかざせばふるさとの　さらにこひしくなりにけるかな　中山康子

みよし野の花のふゞきはふるさとに　はなみしむかしのしのばるゝかな　黒田美津子

たぐひなき吉野のはなをみてしより　にほひばかりをふきおくるなん　山代由子

春くればはなみるたびにおもふかな　ふるさとびとをおもひやるかな　虎口貢子

花をみてすごせしつき日かぞふれは　わがふるさとのにはのさくらを　溝口貞子

わがふるさとのしのばるゝかな

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

みよし野の春にあきてもおもふかな　わがふるさとのはなはいかにと　下田龜子

かりかれよ待てこそつてん花かけに　わかふるさとのはるをしのふと　西川順子

旅やかたふるさとおもふうきなかに　はなのいろかのなつかしきかな　石井登子

學びやのそのふのさくらさきそめぬ　いざふるさとのはなやたづれむ　木村菊子

花みればむかしのはるの〳〵のはれて　ふるさとひとそこひしかりける　永井いい子

よしの山はなのさかりときくからに　まづいてゝ見るふるさとのそら　根田よし子

色も香もおなしなかめのはななから　なほしのはるゝふるさとの山　山方春子

あつまちに咲けるさくらを見るにつけ　なほしたはしき鄕のふるさと　大塚小松子

見るたびにさしふるさとを思ふかな　はなのさかりのそのゝゆふぐれ　稲見きよ子

いひしらぬ春のてそめのいとさくら　ふるさとひとやいかに見るらん　山下さよ子

たらちれの好み給ひし梅の花　見るにつけても如何にしつらむ　田中倹子

花ざかりよものやまべにあくがれて　みるもこひしきふるさとのそら　高やす子

さく花を見るにつけてもふるさとの　むかしこひしくなりにけるかな　田代綾子

さくら花みるたびくにおもふかな　山田稲子

奈良のみやこのはなのさかりを

ふるさとの花もかゝらむとおもふこそ
　はるのなげきのたねとなりけれ　中村きよ子

たらちねは待ちやわてらん咲き匂ふ
　はなのにしきを着てかへる日を　藤井りゑ子

ものおもひなしとは云へど花みれば
　なほふるさとぞしのばれにける　河野みち子

四月五日兼題　運動會を觀る記

地　　松山市一番町　宇高松子

今日は、空も長閑なり。さのみ遠くもあらねば、中學校の運動會を觀に往かばやと、わざ〲伯母上の誘ひ給ふに、幸、さしたる用事もなく、父上も直に許し給ひたれば、いと嬉しく、末の七歳になれる從弟と共に、三人して往く。いと廣き場の内に圓形に廣く縄張られたるは、やがゝ壯健なる生徒達の活潑なる運動場にぞある。後には幔幕打渡し、其の前には交叉したる國旗校旗及び小さき萬國々旗の、春風にひるがへる樣、いとのどかに美し。間も無く勇ましき音樂と共に運動は始められぬ。旗奪ひ、嚢競走、二人三脚など、とり〲におもしろく、わけて、障碍物あるは競走中に衣服を着かへなどする、いと面白し。此度は兄上の番なりと、從弟の喜び告る間もなく、七八人斗りの生徒の、おのれより少し小さげなる生徒を負ひて、馳せいだす。從弟は、絶えず兄樣負けなよ〲と呼はり居しが、兄の後れんとするを見て、得堪ずやありけん。走りいでゝ手を揚げ足ふみならして呼はる聲に、力をや得けん、はた得やよかりけん、幸にも一等賞を得たる。己れさへうれし。まして從弟は倒れん斗りに馳せかへりて、伯母上の制し給ふをも聞かず、兄樣が勝たり〲と喜びさはぐ樣をかしくも又ろうたし。又は機械體操なり。枝のよしやあしは知らねども、其の身の輕きは、木傳ふましらもかくやとおもはるゝ斗りなり。殊に、大和魂とかいふなる枝よ。手にかたく鐵棒を握りて、體を上下に廻轉する樣、實に側に見る目も危く、汗あびるこゝちなるを、いとやすげに六度斗りも廻りて、かる〲と飛び下りたるに、人々の拍手喝采沸くがごとし。かくて、終りに師の君達の競走あり。其の中には、若しげなる斗り肥へ太り給へる校長の君をも見受けまゐらせぬ。日頃の御心つかひも、今日は打忘れ給ひたるげに、年少き生徒等と共打興じ給ふも、いとかしこしや。

實に德育智育のみならで、かく體育にまで御意注がせ給ふは、限りなき大御代の惠と、深き師の君達の御情とによりてこそど、いと〳〵嬉しうなむ。

山口縣都濃郡末武下村　村上操子

人

ふくろを頭にいたゝきて、遠き道をひたばしりにはしりて、彼岸に達するをあらそひ、あるひは長きつなをひき、西に東にまろびあひて、遂に勝をしめてよろこびあへる。そのほか、さま〳〵運動のわさに、生徒のおのが心ゆくかたにあそびたはふる。見る目もいとをゝしく、かつは、をかしうなむ。むかしは、かゝる事はもの學びやには、やくなき事といましめたりときけど、今の世はつとめて、之に力いれたる。ひとつには、日頃書よみつかれし心をなぐさめ、ひとつには、體育といふ事に、心をもちゐるからなり。猶德育といふことについては、今更いはむも中々をこなれど、智體兩育も、亦決して、すつべからざるわざになむ。

（以下原稿到着順）

河原芳子

二見の浦は濟き渚に咲き匂ふ花見よりも、猶うるはしき、をさな子ら、あまたつどひて、それのまなびや、くれの學やなど、匂やかに染めいだしたるしるしのはたを、のどかなる春風にうちなびけて、こゝかしこに喜びの聲高う、立ち上る砂烟の中をかけまはり、あるは旗さり、走りくらべなど、われ劣らじと勇み狂へる心の程、おもへば末たのもしのやまとをの子なるかな。をみな子は、さすがやさしう、唱歌の聲低ううたひつれて、余念なく貝ども拾ひありき、よろこばしげにさゞめくありさま、たさしへなういさしげなるものから、立らかへり、同じ心に遊びあひたる程は、なほなかしく、あくよなくてなん。ひゝりし程に、つどへよとの笛、こゝにかしこにひゞきわたれば、いみじうどよめきつ、あたらしげに見かへりながら、列してかへりゆくなるに、夢よりさめし心地して、かへさのたど〳〵しさ、ねもいはれざりけり。

岡田春子

白き赤き旗いみしうたてつられ、同じ色なる緜打はりて、中に唱歌の聲床しう聞ゆるは、運動會にもやあらんと、たちよれば、げにさなりけり。勇ましげに、いでたちたるをの子、優にはかまうがちたる女子ども、面がほたゝへて、遊びまはる中に、師さおぼしき人の、此の度はかの遊びやよからむ、此の遊びやをかしからんと、いひいづるに、打遊びて走りいだすもあり、おくれて追ひかくるもあり、こなたは、手ひきあひて、歌うたひつゝ樂しむもあり。中には賞品得てくるなど、よそのみるめも嬉しきを、敎の親に、學びの友に、打揃ひて遊びゐる子の、心のうちや花みるよりも、樂しかるべしなど、思ひつゝ、はからずも、時を移しゐるに早時きぬと、皆打興びいろ〳〵さ、大路を歸りゆく正しさよ。いづこの學びの園かしられども、敎へのおやの、いかに心つくしてやしなへるなでしこにやと、思へばいと床しや。

佐々有鄰子

四月三日の神武天皇祭に、菊池高等小學校に、生徒の遙拜式を行ひぬ。學校長演說して曰く、掛卷も畏き、神武天皇は、高千穗の宮

に坐して東征を思ひ立たせたまひ、日向よりたたして、豊國の宇沙にいたり、筑紫の岡田宮、阿岐國の多祁理宮、吉備の高島宮などに坐ますと十六年あまり、それより御船に浪速の津を經て、紀國にいたりまし、八咫烏といふ神に導びかれたまひて、吉野にいたり、道臣命、大久米命におほせて、まつろはぬものどもをきりはふらせたまひ、白檮原宮に坐して、天下を治たまひて、御年百卅七歳の時に崩御させ玉ひしと、曾祖に説ききかせて、此の式はをへぬ。それより、教員が一聲の號令に、生徒はいかになすかとみれば、校旗を春風にひるがへして、校門をいでぬ。門前にて隊を組み、銃をかたにかけ、東方さしてはせ行たり。さしもにひろき菊池原に。ラッパのこゑ、しきりにきこゆ、妾も二三の友人と。うちつれ、生徒の後を追て、こゝの松原かしこの櫻花の蔭に。たゝずみて。八百餘名の生徒が進退をみるに、そのいさましきこと二千五百六十年餘のむかしの神武天皇御東征のおもかげさへ心にうかびて、實に教員が、日本魂を鍛ふる教訓の、ゆかしく、なづかしきは、今日の生徒が運動會になもありける。記して紀念となす。

伏脇米子

父君の仰を、かしこまりながら、日頃、弟の、文よむ業をよそにして、學校より歸り來る、即て、雲を霞と外出して、驅け巡と、歩きしが、昨日の夕つ方なりき、我等が待ちに待ちにし運動會は早や明日となりぬ。氣晴しがてら、姉上連れて見に來ませと、傍なる人をそゞのかしければ、今日下婢從へて、母刀自諸共に見に詣りぬ。會場に至りし頃は、はや、幟、傘、男、女、老いたる、若き、縄張圍みて、人山築けり。見る心からにや、色別の旗の、春風に飜るさへ勇しげなり。鐘鳴りて業初りぬ。まづ、徒競走、提灯競走より、擬馬、鐵行進、或は兵式体操など、何れをかしからぬはかなりしが、特に塗み居る限り笑ひのゝしり、をめきくつがへりしは、障害物競走なりしよ。頭は、た手足といはず、数多綱の目に懸りて推し合ひ、まろひ合ひするまに、賢しきは、早や授賞台の前に着きぬ。何やらん、おし戴きて勇み歸るを見れば、我が弟も、其の一人なりけり。即て餘興なる綱引も見はてゝ、萬歳の聲と共に、　立ち歸りぬ。あはれあどけなきいたづら遊に似たれども、そも「健全なる精神は、健全なる身體に宿る、」てふを思へば、實に尊き業なりや。さても弟の還入より、今返りぬと呼びくる聲の、勇しかりしのみか、肩そびやかし、足踏高く歸り來し姿の、をかしかりしことよ。さすがに、父君も笑み給ひて、何を得しかなど、の給ひかけしも、をかしうてなん。

明治卅三年度女鑑歌文月次兼題

歌、遙見山花
四月廿日　文、わがたのしみ
歌、述懐
文、試驗の成績を姉に報する文　四月廿二日限
五月五日
歌、新樹
五月廿日　文、前題の返事　五月八日限

小松宮殿下御臨覧

天下無比

との御染筆を賜ふ

淺草公園

珊瑚閣

パノラマ隣

●**世界第一の大珊瑚**は實に天下の寶物で是を有するは我國の**一大名譽**であります

●其他美觀珍見は多々ありまして**天下の目**を**驚**すに足り又實業及學術上有益なる參考となります

●其名譽ある本閣の**珊瑚珠賣品**は正札附にて信用を旨とし素人買には殊に御安心であります

●本閣が**世界の新聞**紙上に好評を得て名譽を天下に博するに至りましたも故なきことではなからうと思ひます

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

女子處世論　全

菊判美本

定價二十錢　郵稅四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徴し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

本誌既刷の二萬冊は販布し盡し暫く江湖大方の愛顧に負けり今や增刷成る敢て諸賢の愛讀を辱うせむ事を切望す

臨時 國光 發刊

人心の頽廢、風俗の淫靡底止する所なく邦家の將來に洶痛憂に堪へず冀は此の冊子をして惰眠社會に於ける半夜の警鐘たらしめむ。

◎世界に於ける日本の地位及其現勢◎日本教育の大本

◎此の風俗の頽廢を奈何（以上は本社の勵聲疾呼して憂世慨時の士に質さむと欲する所のものなり）

（劍光）拜金主義と道德●矯世危言●憲政完美の要訣、●師弟の情誼と現行法律●古今の主義の難點●獨逸海外政策に感わり●日本の國富と人民の負擔●農家の有志者に告ぐ、（以上同憂志士の寄稿にして沈痛剴切なる濟世の忠言也）

（瓊德）東久世伯勅語要義●蒼海先生偶話仁と智●忠本論●人世禍福の岐路●機言●養心論（以上何れも皆日本思想の本源に遡り君子國人の本領を發揮せむとを主旨とせるもの也）

（鏡影）德川齊昭（硯海）●孝明天皇御逸事●朝倉の大宮柱●太古史の研究につきて●琉球語研究資料、（以上何れも皆國史上の一新光彩）●和歌●詩●文、精を拔き粹を蒐め●八瀨の炭竈、は日本武士の眞面目を描出せる小說なり●昔の塾舍と今の寄宿舍、此の他、畸人傳、名勝誌、佳話一束。

二月十一日紀元節（臨時發刊）に限り金參拾錢（紙數凡二百五十餘頁）本誌定價郵稅共一冊金拾錢

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は現御住所前御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

三月廿日

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及逓送にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	半頁金六圓 一頁金拾圓
十二冊前金(半年分)	壹圓	廣告料前金にあらざれば掲載せず
全國無遞送料		

明治三十三年四月十四日印刷
明治三十三年四月十五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木良雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

蓄音器新工夫一大進歩の至急廣告

蓄音器は更に新工夫を加へて一大進歩を爲し目下其品漸く本堂に着荷したり◎従来の蓄音器に比ぶれば其特色の要點は左の如し



◎音聲非常に高朗にして従前の如き低聲にあらず◎喇叭はニッケル鍍なれば少しも音聲を紊す事なし◎器械の要部に塵除を附けたれば塵埃の入る憂なし◎螺管の製造は従前に比ぶれば堅硬にして肉厚し故に如何なる炎暑にても熔解する事なくしかも永遠に保存して變調する事なし

價格は

甲種　金六拾圓
乙種　金四拾八圓
丙種　金三拾八圓

◎市外遞送料金五十錢

此新工夫は一大進歩の蓄音器第一着荷は員數に限りあるを以て御望の紳士閣下早く御來需あそばされよ後れては人手に渡るべく候　早々頓首

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
(電話番號新橋三百三十三)
(長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三)

時計及寶玉類貴金屬美術品商

天賞堂



妙技一等牌賞

東京神田小川町(電話本局二二六〇)　天賞堂小川町出張所
横濱尾上町五丁目(電話八七六)　天賞堂横濱出張所
大阪心齋橋北詰(電話東七三三)　天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目　天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地　天賞堂廣島出張所
熊本市上鍛冶屋町十番地　天賞堂熊本出張所
長崎市今鍛冶屋町四十番地　天賞堂長崎出張所
福岡市松口町榮屋方臨時　天賞堂福岡出張所
北海道小樽色内町越中屋方臨時　天賞堂小樽出張所

(明治二十四年八月四日內務省許可)
(明治二十五年四月十二日遞信省認可)

(印刷所　東京國光社印刷所)